Original Paper
［査読有り］原著論文

脱植民地化を目指すバルバドスの白人マイノリティ
—白人認識のナラティブ：特権・反人種差別・白人としての責任—

Marginalized dominating white minority in decolonizing Barbados
— Narratives on perceived whites, privilege, anti-racism and white accountability —

伊藤 みちる
大妻女子大学国際センター

Michiru Ito
International Center, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：白人性，オーラル・ヒストリー，白人特権，バルバドス，カリブ海
Key words：Whiteness, Oral history, White privilege, Barbados, The Caribbean

抄録

本稿は，旧英領バルバドスの圧倒的少数派であるヨーロッパ系市民がどのようにマイノリティとしての「白人」認識を持つようになったのか，また白人としての経験にどのような蓄積があるのかを探求した．2016 年と 2017 年はバルバドスでヨーロッパ系市民を対象にオーラル・ヒストリー聞き取り調査，2021 年と 2022 年にオンライン補完聞き取り調査を行った．肌の色の違いには学齢前に気づくが，自身が「白人」であることや人種的な社会境界については，多数派であるアフリカ系の同級生との日常的な交流をもとに 10 代で気づくようになる．白人至上主義思想や人種差別的な社会不平等を正当化する特権意識に対する非難，そして人種間の不平等が当然なものとして存在する社会に対する白人としての歴史的責任の認識が聞かれた．他方で若者は，白人という理由だけで特権を享受できる時代は終わったとして，白人が優遇される人種間の不平等の存在自体を否定した．

1．はじめに

本稿は，カリブ海最東端に位置する 430 ㎢の島，旧英領バルバドスのヨーロッパ系市民の白人性構築過程の一端に焦点を当てる．白人性は非白人に対する優越性や社会的・経済的特権の認識である．

1966 年に英国から独立後，バルバドスの政権は植民地時代に被支配層であったアフリカ系黒人市民が担うようになった．その一方で，人口の 2.7% を占める圧倒的少数派のヨーロッパ系白人市民が，今でも植民地時代と変わらない支配的な存在感を社会で維持している[1]．彼らの全員が必ずしも植民地時代に入植者や植民地政府役人といった支配層を祖先に持つわけではない．彼らの多くは，さまざまな分野においてバルバドスを開拓してきた労働者の子孫である．

バルバドスのヨーロッパ系市民は人口が少ないため社会への影響を過小評価され，量的研究も難しく今まで社会研究対象になってこなかった．またアフリカ人奴隷を搾取して蓄えた巨富を世襲し，社会的特権を享受し続ける権力者としてアフリカ系市民から「ずるい悪者」と烙印を押されてしまい，注目に値しないとされてきた[2]．

本稿は，その「ずるい悪者」とされるヨーロッパ系市民個人の経験に着目した．今までその生を聞かれることのなかった社会の一員に光を当てることで，圧倒的なマイノリティがどのような経験を通して少数派としての「白人」認識を持つようになったのかを探求する．そしてそれによって何が示唆されるのか，その示唆された社会的現実から浮かび上がる社会問題に我々が取り組むために何が必要なのか．植民地時代の精神や社会構造からの解放を求めて脱植民地化を目指すバルバドス社会の多角的な理解に向けて，バルバドス人の語りを手がかりに考えたい．

2．背景

本稿は，自身を白人として認識し他者からも白人として認識される，3 世代以上バルバドスに住む白い肌を持つヨーロッパ系市民が「いつ・どのような経験をして白人であると認識したか」を探る．21 世紀現在，バルバドス総人口の 2.7%を占める「白人」の歴史的・社会的背景は様々である．

2.1. 英国植民地時代

カリブ海の東端に位置するバルバドスは，1625 年にイングランド人が上陸し，ジェームズ 1 世の名の下に英国植民地となった．バルバドス入植開始当時には先住民の漁労基地は存在していたが，イングランド入植者を妨害する先住民コミュニティは存在しなかった[3]．考古学調査によるとバルバドスには 350 年頃からアラワク語系の先住民であるサラドイド・バランコイドが定住しており[4]，1627 年には先住民の生活跡が見られると入植者によって記録されているが[5]，1673 年のバルバドス初の公式人口調査は，先住民の人口集計をゼロとしている[6]．ドミニカ国やセントビンセント及びグレナディーン諸島など近隣の山がちなカリブ諸島とは異なり，平坦なバルバドスでは山中に逃げ隠れることができず[7]，16 世紀から始まったスペインによる先住民奴隷化の犠牲になった[8]．

その平坦なバルバドス国土はプランテーション開発に好都合で，大英帝国の大きな収入源である砂糖の一大生産地として開拓された．1660 年～1670 年代にかけて，バルバドスは新大陸のイギリス植民地のなかで最高の繁栄を遂げた．砂糖貿易によって莫大な利益を上げ続け，英国議会で強大な政治的影響力を持つようになったのは，主にイングランド出身の英領バルバドス砂糖プランテーション領主である[9]．その砂糖プランテーションで労働者として酷使され続けたのは，多数のアフリカ人奴隷の他に，アイルランドやスコットランド，イングランドやドイツの貧困層や政治犯，年季契約労働者や農業移民であった．つまり「ヨーロッパ出身の植民地白人住民」と一口に言っても，砂糖プランテーション領主や植民地政府の役人，年季契約労働者「プアーホワイト」，そして劣悪な環境下で命を落とすまでアフリカ人奴隷と同様の肉体労働に従事した「白い奴隷」と呼ばれていた者たちが共存していた．このようにバルバドス植民地においては，白い肌を持つヨーロッパ出身者の立場や出自は多種多様であった．

イングランド人の入植開始と同時にヨーロッパから強制連行され，アフリカ人奴隷と同様の重労働を課された「白い奴隷」の存在はバルバドスを特徴づけている．この点は他の英領カリブ海諸島の入植史と比較して大いに異なる点である．つまりバルバドスでは入植直後から支配層と被支配層の白人が存在し，その多層化した白人社会にアフリカ人が奴隷として導入され，被支配層の白人労働者と同様の農作業を黒人奴隷が行った．ヨーロッパ出身だからといって農作業が免除されるなど特別扱いされることはなかった[10]．

バルバドスと同様に 1833 年に奴隷制廃止を迎えたカリブ海地域の他の英国植民地の例を挙げると，1834 年に英領ジャマイカはアフリカ人奴隷に代わる労働力としてドイツから農業移民を受け入れた．したがってジャマイカのドイツ人労働者はアフリカ人奴隷と共に農作業をした経験はなく，奴隷という身分から解放されたばかりのアフリカ人と農作業に従事した．しかしその場合，アフリカ人とドイツ人では作業内容が分業されていた[11]．

また同時期の英領トリニダードにおいては，ヨーロッパからの労働移民は農園で重労働に従事することはなく軽労働をあてがわれた[12]．トリニダードでは移民二世ともなると，農園労働といえども監督など労働者を管理する立場に昇進し，被支配層に留まり続ける白人労働者はいなかった[13]．このようにカリブ海地域の英国植民地では島ごとにヨーロッパ系労働移民の待遇が大きく異なっていた．

植民地社会における被支配者としての白人労働者とアフリカ人（元）奴隷の関係性が，その後の社会における人種関係構築に影響を与えたことは想像に難くない．旧英領トリニダード・トバゴの初代首相 Eric Williams は Capitalism and Slavery（1944）において，存在自体をいなかったものとして黙殺されがちな白人労働者に光を当てた．商品として売買されたアフリカ人奴隷と比較し，社会的に好ましくない棄民としてヨーロッパから強制連行されてきた，無料で代わりはいくらでもいる「白い奴隷」の方が，目も当てられないほどさらに残酷な扱いを受けていたと記している[14]．

年季契約労働者「プアーホワイト」については，10 年間の労働契約締結をするために，一人のアフリカ人奴隷を死ぬまで酷使する権利を入手するの

と同額の金額が必要であった[15]．雇い主にとっては年季労働契約満了後に労働者がどのような心身状態になっていようと，自分の懐には関係のないことなので，とことん搾取し続けた．オックスフォードの歴史家ハーロウも，ことさら過酷な労働環境のもとに白人労働者が置かれていたことは議論の余地がないと結論づけている[16]．一生使える商品（アフリカ人奴隷）は壊さないように使うが，代替品入手が容易な無料の消耗品（「白い奴隷」）や限定期間内であればどんな使い方も可能な商品（「プアーホワイト」）は，壊れてしまったら性能の良い新品に代えることができた．そのため，白人雇用主による白人労働者の扱いは必然的に乱暴になっていた．

植民地時代，特にプランテーション経営における奴隷所有者のアフリカ人奴隷に対する残酷な扱いは周知の事実であるが，少なくともバルバドスにおいては一部の白人労働者に対しても同様，もしくはそれ以上に厳しい仕打ちが行われていたことにも注目すべきである．そしてバルバドスのアフリカ人奴隷にとって白人は，支配者だけでなく，自分たちと一緒にプランテーションでの非人道的な重労働を一緒に耐え抜く仲間でもあった．

2.2. 英国からの独立後

1966 年に英国から独立後，バルバドスにおいては，トリニダード･トバゴなど他カリブ諸国と同様に，特定の人種・民族を優遇･冷遇することが法律で禁止され[17]，人種・民族間の内戦が起こることもなく，少なくとも表面上は，平和的な多民族共生社会が展開されてきた．一方で 21 世紀の現代社会においても，植民地時代からなんら変わらずに，富や機会の分配が肌の色に基づいて不平等に行われることが事実としてある．総人口の 1 割にも満たない社会少数派であるヨーロッパ系市民は，「白い奴隷」や「プアーホワイト」，そして植民地時代の支配層の子孫から構成される．「白い奴隷」や「プアーホワイト」の子孫は，多少の例外を除いて，現代バルバドス社会階層の上部に属すようになり，支配層の子孫と共に，社会的・経済的・文化的強者として，バルバドスを精神的に支配するようになった．要するに，植民地時代には被支配層に属していた「白い奴隷」や「プアーホワイト」には，独立後の社会で階層上昇を可能とする機会があり，実際に多くの人がそれを実現しているのである．ところが同じく被支配層に属していたアフリカ人奴隷の子孫は，「白い奴隷」や「プアーホワイト」の子孫と比較し，階層上昇の機会にはそれほど恵まれなかった．

プランテーション経営による利潤を求めることが難しくなると，多くのプランテーション領主たちは祖国イングランドへ移住した．プランテーションがなくなり農奴として生計を立てられなくなった労働者たちは工場などで働くようになり，彼らの子どもたちは農作業の手伝いをすることなく無料の義務教育を受けるようになった．英国の植民地支配しか経験していないバルバドスは独立後約 60 年を経ても，さまざまなイギリス文化や制度を色濃く残している．それは他の旧英領カリブ地域と比較しても顕著で，特にバルバドスの教育は植民地時代から今に至るまで「イギリス式」で「正統」であるから質が良いといわれている．現在のバルバドスの政治家や弁護士，事業家や財界人の中には，先祖は「白い奴隷」や「プアーホワイト」であったことを明言する者が少なからず存在する．そのような者たちは，教育こそがバルバドスの閉鎖的な階層社会を上ることを可能にしてくれたと口を揃えて言う．

植民地時代から蓄積してきた財力を元に絶大な政治的影響力を持つエリート層・富裕層に一度属してしまえば，その富を守り続けることが可能なシステムが，植民地時代からバルバドス社会には存在している．例えば政府が税収を増やそうとして行っている相続税や固定資産税などの社会システムの大幅な改革は，植民地時代に形成した莫大な富を減らさずに先祖代々受継いでいくことを可能にしてきたシステムを是正するものである[18]．このシステム改革が成功してしまうと困る立場にいるのは，現在それなりの社会的・経済的・政治的な「力」を持つ人たちである．このシステム改革は未だ成功していないし，ちかぢか飛躍的に進捗が見られることはないであろう．したがって植民地時代に蓄積された富はそのまま，その富を蓄積した者たち，つまりヨーロッパ系市民が植民地支配終焉後も受継いでいくことができる社会が展開している．また独立後新たに社会階層を上り階層上位に属すことができた者も，階層内の有益な人的ネットワークを有効活用し，社会的に優位な立場を享受し続けるようになる．

2.3. バルバドスのヨーロッパ系市民

2019 年の人口調査によると，ヨーロッパ系市民はバルバドス人口の 2.7%を占める．それ以外の 9 割以上の人口はアフリカ系市民であるため，アフリカ系の印象が強い社会が展開している．短期滞在であったり，社交活動が限られていたりすると，バルバドスではアフリカ系市民にしか出会わないであろう．しかしそのようなバルバドス社会には，かつて植民地時代にヨーロッパ系市民しかアクセスできない「白人オンリー」だった場所があった．現在もその伝統が亡霊のように残っており，給仕係以外はヨーロッパ系市民やアジア系市民，もしくは白人旅行者しかおらず，真っ白ではないにしろ，十分に白っぽい．そのような場所の例は，一部のゴルフコースやヨットクラブ，バルバドス版カーニバル「カドゥーメント」のグループ，私立幼稚園・学校，さまざまなコミュニティなどである．現在は「白人オンリー」という規則は存在しないものの，ヨーロッパ系でない人物は歓迎されていない雰囲気を感じ取るであろう．しかしそういった場所へのアクセスを得ることによって，ありとあらゆる情報が耳に入るバルバドスの強力な人的ネットワークに属すと，十分に恵まれた機会を得られるようになり，より豊かな生活が送れるようになることは確かである．

ヨーロッパ系市民が現代バルバドス社会においてどのような相関関係をアフリカ系市民など非ヨーロッパ系の社会構成員と築いているのか等の社会学的研究は，管見の限り存在しない．近年，アイルランド移民史研究の一環として，バルバドスへの移民史が注目を浴びている[19]．植民地時代のヨーロッパ系労働者が置かれた劣悪な労働環境を指摘する歴史研究も存在する[20]．「白い奴隷」の子孫が未だバルバドス社会の最貧困層として存在し，政府の社会福祉支援を受けながら生活している姿を描いたドキュメンタリー短編映画も制作された[21]．また 1970 年代，人種による社会不平等の是正を求めたブラック・パワー運動が起こった際にアフリカ系市民側に立ったヨーロッパ系市民についての研究[22]も存在する．しかし現代社会におけるヨーロッパ系市民の生活実践や実態に関して言及を行っている研究は見当たらず，アフリカ系市民に関する膨大な量の研究[23]と比較すると，知見の蓄積の差は歴然としている．

ヨーロッパ系市民が研究対象にされてこなかった理由は前述にもあるとおり，圧倒的な社会少数派であることが第一に挙げられる．人口の 2.7%しかいない白人は，表象的にアフリカ色が非常に強いバルバドス社会に大した影響力を持たないように見える．そしてこれだけ人口が少なく，社会の表舞台に出てこない白人を母集団と設定する量的研究は難しい．またヨーロッパ系市民については，総括的かつ一方的に，植民地時代にアフリカ人を奴隷としてアフリカから強制的に移住させ，労働力として非人道的な方法で搾取した奴隷所有者の子孫であるから注目することは好ましくないとする社会風潮がある．つまり彼らの多様で多層な背景にはまったく焦点を当てられることなく，人口の 9 割以上を占めるアフリカ系市民によって，偏狭な既成概念をもとにヨーロッパ系市民は「社会悪」として認識される．したがって精神的・経済的・政治的に脱植民地化を推し進める現代のバルバドス社会において植民地時代の象徴であるヨーロッパ系市民の存在を可視化することは政治的に歓迎されにくい．加えて，ヨーロッパ系市民の特権的立場を指摘することによって，人種・民族の分け隔てなく統合を成し遂げようとする社会的努力を無碍に否定することになりかねない．

バルバドスのヨーロッパ系市民を対象としてフィールドワークをするたびに，バルバドス人からさまざまなコメントを受けた．アフリカ系市民からは，ヨーロッパ系市民を研究対象に据えることに対する批判が主流であった．なぜこの 21 世紀にわざわざバルバドスのヨーロッパ系市民について知りたいのか，もう白人奴隷主の時代は終わった，白人はすべての社会悪の根源だ，人種差別主義者なのか，白人なんてどうでもいいではないか，白人について研究する必要はない，という発言が多かった．他方，ヨーロッパ系市民は謝辞が主流で，バルバドス社会に存在しない者として扱われる，「死に絶えゆく種（バルバドスにおいてヨーロッパ系の人口が減り続ける状況の皮肉）である我々白人に関心をもってくれてありがとう」との発言を受けた．また筆者の属性に関連し，「白か黒のどちら側にも属さない日本人だからこそできる研究だ」と指摘された．

つまりバルバドスのヨーロッパ系市民は白い肌を持っているだけで，社会の大部分を占めるアフリカ系市民から，植民地時代にアフリカ人奴隷や先住民を大量虐殺した入植者や奴隷主の子孫であ

ると一概に決めつけられ，現代社会の人種的不平等の元凶である「『社会悪』だから調査対象とするべきではない」と断罪されてしまう[24]．このような存在であるヨーロッパ系市民を，本研究は研究の対象とする．大体，バルバドスのヨーロッパ系市民がどれだけどのように「社会悪」なのかといった量的･質的データに基づいた現代社会分析に関する報告はない．外国からやってきた一研究者である筆者に対し，感情論で押し切ろうとする多数派アフリカ系市民の姿勢こそが，少数派ヨーロッパ系市民に対する関心を駆り立てる要因である．

バルバドス社会を偏見なく理解するためには，植民地時代から現代までカリブ海地域に甚大な影響を与えてきたヨーロッパ系市民の存在や彼らの経験を無視することはできない．ヨーロッパ系市民の経験や非ヨーロッパ系市民に対する態度が，すべての人種・民族の統合を目指す現代社会のあり方として相入れないものであっても，それはそれとして現代バルバドス社会の実態を表す事例として尊重したい．

また「社会悪」とされるヨーロッパ系市民は，同時に「憧れ」の的でもある．植民地時代，ヨーロッパ系白人のプランテーション領主は，主にアフリカ人奴隷に対し，自らの社会的･経済的特権と優位性を強調し，強制してきた[25]．そのため「白人は裕福で優れていて特別な存在」という感覚が，アフリカ系市民が抱くヨーロッパ系市民に対する価値や精神として現代まで受継がれている[26]．バルバドスのみならず，またカリブ海地域だけでなく，世界中のヨーロッパ列強による植民地支配を経験した地域では，植民地支配層であったヨーロッパ人の白い肌を「良いこと」「優れている」とする価値観が植え付けられている．そして肌が白ければ白いほど社会的優遇を得る機会に恵まれるとされる社会が構成されている[27]．そのような地域では，若い男女を中心に化学物質を用いた肌の漂白が人気を博している．しかしそれらの事例とそれらを原因とする健康被害についての報告は後を絶たない[28]．白人に似た身体的特徴を持つ者が優遇され，優位にあるとされる風潮がある社会[29]においては，健康を害しても白い肌を求める風潮があることは明らかである．

バルバドスのアフリカ系市民の肌は，濃淡の差はあるが，間違いなく黒い．1960 年代，アフリカ系アメリカ人は標題 “Black is beautiful” を掲げ，アフリカ系の身体的特徴やアフリカ起源の文化の尊重を謳った運動を始めた．それは瞬く間に世界中のアフリカ系人口を抱える国・地域に広がり，カリブ海地域にも到達した．バルバドスでは今も，ことあるごとに “Black is beautiful” を耳にするばかりか，黒人としての自身を愛せと，自己肯定を促すポスターも街角に貼ってある．Ferguson and Cramer (2007)は，自身の黒い肌に肯定感を抱けず，「自分でない誰か」になろうとするカリブ海地域の少年について，成人しても自己肯定感が低く，学業や社会でも成功を収めることが難しく，それがカリブの社会経済開発の妨げとなっている旨を指摘している[30]．このようにアフリカ系市民は，“Black is beautiful” という標語を口にし，ヨーロッパ系市民を「社会悪」だとしながらも，社会的特権を持つヨーロッパ系市民を羨み，憧れの彼らの容姿に近づこうとする．このようにヨーロッパ系市民は，アフリカ系市民から羨望と嫉妬のまなざしを向けられながら生活しているが，それは既に社会問題のレベルに達している．

2.4. 白人性

本稿ではバルバドスのコンテクストに合わせて，「白人」という言葉を「ヨーロッパ系市民」と同義に使ってきている．しかし世界各地の事例をみると，「白人」は必ずしもヨーロッパ諸国出身者ばかりではない．そして 21 世紀現在のヨーロッパ諸国出身者は必ずしも「白人」だけではない．一般的に，「白人」とは誰のことを指すのか．

1990 年に米国主導の国際協力によって始まったヒトゲノム計画は，2001 年にすべての人間は 99.9%以上の DNA 構造を共有していることを判明させた[31]．したがって科学上は人間の種類，つまり「人種」は存在しないことが明らかになった．それにも関わらず，個人が持つ DNA 構造のうち 100 分の 1%の差異によって現れる，髪の毛の形状や色，目や肌の色などの表面的な身体的特徴を基準に，白人・黒人・アジア人などと人間を種別する習慣が社会的事実として存在する．そしてその種別された人間は，「白人だから知能が優れている」「黒人だから足が速い」「アジア人だから数学が得意」といった科学的確証のない，多くは荒唐無稽なラベルを付け合い，あたかもそれが生物学的に立証された特徴であるかのような言説に基づいて説明される．そのうち一部の言説に関しては，ヒトゲ

ノム研究の発展により，例えば速く走るための筋肉を作る遺伝子型が判明したりして，部分的な科学的根拠らしいものは存在するようになった[32]．しかしそれは特定の肌の色の人間が比較的高い割合で持ち合わせる遺伝子型ではあるものの，決して独占的に持っているわけでもなく，異なる肌の色の人間にもその遺伝子型を持ち合わせている者は存在する．したがって，肌の色など身体的特徴を根拠とするラベル付けは意味をなさない．

黒人・アジア人を決定づける遺伝子型が存在しないのと同様に，白人特有の遺伝子型は存在しない．したがって，黒人・アジア人との違いが科学的に立証された「白人」は存在しない．しかし我々が生きる世界は人を種別し「人種」に分ける機会が往々にしてある．種別に用いる基準は身体的特徴だけではない．宗教・言語・習慣など文化の違いは種別の基準として一般的である．例えば，ヘジャブをつけた青い目・白い肌のペルシャ系イラン人女性は，少なくとも一般的な日本の感覚においては，「イスラム教徒」となり，目や肌の色といった身体的特徴よりも，ヘジャブの社会的・文化的表象が前面に強調されるため，彼女の種別は「イスラム教徒」となるであろう．もはや「人種」が遺伝子によって左右される身体的特徴による種別ではなく，その人物を種別する側の社会的および文化的な価値観を基準とする種別となっている．このように，社会的・文化的な環境因子が，「人種」の決定打である[33]ことがわかる．要するに「人種」は社会的言説の産物[34]であり，「白人」は社会的に構築された人の種別である．したがって社会的コンテクストが違えば，異なる「白人」が存在することになる．

現代の日本ではスペイン人やポルトガル人，イタリア人やギリシャ人は一般的に「白人」とみなされるであろう．しかしカナダにおいては異なるようである．藤川（2010）が引用する，ダグ・ダニエルズのカナダの大学生を被験者として行った実験結果[35]が興味深い．様々な国の国民を白人として認識するか問われた学生は，スペイン人やポルトガル人が白人であることに疑問を呈し，イタリア人やギリシャ人が白人であることには反対した．白人であることに反対した理由は明らかではない．おそらく国名や国名が伴うイメージが白人らしくない，ということであろう．また人間の見た目も「白人」であるかどうかの決定打ではない．アメリカではかつて，金髪碧眼の持ち主であっても，黒人の血が一滴でも混じっている人物については黒人と認定する法律が存在した[36]．そして南アフリカにおけるアパルトヘイト時に「名誉白人」とされた日本人は，白人の見た目を持たないにも関わらず，白人が享受していた白人の特権を特別に与えられていた[37]．このように誰が「白人」なのかという問題は，地域や時代，政治情勢などによって大きく変化することがわかる．

では「白人性」とは何であるか．現在，世界各地でさまざまな白人性研究が活発である．世界中の社会学者が集う国際社会学会でも白人性を専門的に議論する研究グループが構成されているほどである．白人を優性とする考えについては，白人性として 90 年代から米国中心に研究が行われてきた[38]．白人性の最大の課題は「人間性の規範や基準として，不可視化された白人性を可視化すること」[39]である．しかし現在の白人性研究は北米やヨーロッパの社会多数派としてのヨーロッパ系白人と非白人との関係だけではない．白人性に関するテーマや対象は多岐にわたる．イランやアフガニスタンなどからの中東系移民が，移住元である中東系文化から離脱し移住先の欧米文化に近づくことで，アラブ人から白人に「格上げ」される事例[40]や，美容整形してまでなりたい理想的な姿とされる日本の事例[41]，白人同様の肌の白さが成功の必須条件と認識されているタイのエンターテイメント業界の事例[42]など，さまざまな人文・社会科学の領域を横断した研究領域として，人種・エスニシティ，階層，ジェンダーなどさまざまな分野を巻き込みながら発達している．このように白人性が構築される要素は地域ごとに多種多様で，また時代や地域によっても異なるため，白人性は非常に流動的な概念である．したがって白人性とは何かという問いに対する回答は一筋縄にはいかない．

上記でみてきたように，「白人性」は地域の社会情勢に影響を受ける流動性の高い概念「白人」が持つ「性質」や「特徴」，「属性」のことである．「白人」という概念自体が定まっていないので，その性質や特徴も定まっておらず，地域や時代のさまざまな影響を受けることになる．筆者は旧英領カリブ海地域の白人性の代表的な要素として，非白人に対する優越性や社会的･経済的特権の認識を挙げる．筆者のトリニダードにおける先行研究[43]

では，白人としての純血性へのこだわりや無条件の社会特権が白人性の基幹であることを明らかにした．同時に老年層と若年層の白人性に対する姿勢の違いも明らかになった．老年層は自身の優越性を信じ，白人としての自負が強く，家族史をとうとうと語る者が多かった．若年層は他社会構成員と同等の存在であること，自身を白人というよりもトリニダード人であることを強調し，主流文化であるアフリカ系文化に同化しようとする姿勢を見せ，家族史についてはよく知らないと言葉を濁す者が多かった．しかし，このトリニダードの白人性に関する事例がそのまま，社会構造や植民地史が異なるバルバドスの白人性に当てはまることはない．

バルバドスの白人性の特異性を語る上で重要な点は，英国植民地下におけるヨーロッパ系市民の経験である．英領バルバドスの入植期においては，アフリカ人奴隷よりもヨーロッパ系労働者の方が先に大量に導入されていた．また 1673 年以降は，アフリカ人奴隷の人口はヨーロッパ系労働者の人口よりも格段に多かった[44]ものの，プランテーション労働内容の人種による分業は徹底していなかった[45]．そのため同作業をアフリカ人奴隷とヨーロッパ系労働者が協力して行っていた歴史を持つ．ゆえに植民地時代には，広大な土地を世襲しバルバドスの政治経済を動かす権力を握っていたエリート層をヨーロッパ系市民が徹底して独占していた反面，単純賃金労働を行う労働者階級では人種による分業の概念が育たなかった．また労働者階級では，日常的に異人種間の交流が存在していたため，植民地時代の早い時期から混血が進んだ．そのため現代バルバドスのヨーロッパ系市民の中には，身体的特徴が「白人」そのものでも数世代前に黒人の先祖を持つ者もおり，その事実を隠すことなく「ヨーロッパ系市民」として生きている．

英国植民地としての 341 年間にわたる苦い歴史は独立したからといって消え去ることはない．独立後 57 年の間に，プランテーション所有層出身のヨーロッパ系市民はさらに富んだ．しかし労働者階級出身者の間には大きな社会格差が生まれた．すべての国民が無料の義務教育機会を等しく得たが，白い肌の者だけが持てる優遇機会を有効活用し社会階層を上ったヨーロッパ系市民[46]が多く存在する他，アフリカ系市民には中流階層が生まれた．他方で，その機会を活かすことができずに，現在も社会最下層に位置し，トタン屋根に半分しか覆われていない家に住み貧困に苦しむヨーロッパ系市民[47]も存在する．そしてこのヨーロッパ系市民が社会階層の両極に存在する点こそが，旧英領カリブ海地域の中でも，バルバドスのヨーロッパ系市民が特殊な環境に置かれているとされる所以である．

以上をまとめると，21 世紀現在のバルバドスの白人性にまつわる特徴（の少なくとも一部または一面）として次が挙げられる．混血の事実が明らかでも身体的特徴が十分に「白人」として通用する人物が白人とされる社会であること，非白人に対して差別的に社会特権を持ち続ける白人もいること，しかし社会特権を持たない最下層に生きる白人も存在すること，したがって社会特権は白人であるからといって無条件で手に入るものではないこと，社会階層の上部に属して初めて社会特権を享受できる立場になることである．では実際に，バルバドスの白人，つまりヨーロッパ系市民は，これらの白人性を持つことができる社会においてどのように白人として自身を認識するようになるのか．

英国から独立後のバルバドス社会研究は，ヨーロッパ系市民との差異によって，アフリカ系市民が区分・階層化され研究対象となってきた．その時に尺度の基準となっているヨーロッパ系市民は規範となる人間性であり，常に普遍的な存在であるとして中心に位置していた．合わせて，ヨーロッパ系市民は研究の対象としては無標の存在であり続けてきた．特にヨーロッパ系市民を頂点とする植民地時代の社会階層が現代にも引き継がれているバルバドスでは，構造的に優位な人種的立場を持つヨーロッパ系市民が彼らに好都合になるように様々な特権を乱用し人種的な不平等を社会に定着させてきた実態は，あえて広く文書化されることはなかった．正視しづらい社会的実態であることは事実である．しかし本稿はその白人特権を持つことができる立場のヨーロッパ系市民の語りを記録する．その目的は，英国から独立後の社会における，見えない構造的な差別の形成と継続を可視化すること，そして見えない権力支配への対抗を試みることである．本稿があえて人口が少ないバルバドスのヨーロッパ系市民を研究対象とするのは，それらの目的達成の一助となることに意義を見出すからである．

3．インタビューについて

3.1. オーラル･ヒストリー

本研究は，オーラル・ヒストリー法に則り実施した聞き取り調査の分析を行う．これはオーラル・ヒストリーが「複雑で多面的な現実にたいして，複眼的な視点から歴史を再構築」[48]できるからである．バルバドスのヨーロッパ系市民については，その実践や実態に関する研究の蓄積が浅い．そのため植民地時代や独立後の社会における異文化や非ヨーロッパ系市民との交流が，どのように個人の白人性構築に影響を与えてきたかについて，個人の経験を質的データとして入手し分析することができるオーラル・ヒストリーを切り口として理解を深めたいと考えた．

平成 29 年度には日本学術振興会の学術研究助成基金助成金の特設研究分野として「オラリティと社会」が創設されるなど，オーラル・ヒストリーは，ライフストーリーやライフヒストリーなどと共に注目を浴びている研究分野である．オーラル・ヒストリーはライフストーリーの下位概念で，個人の経験のうち歴史的な経験や過去の出来事の表象に焦点を当てる研究方法である．ライフヒストリーはインタビューによって得られる個人の経験だけでなく，手紙や日記など個人的記録などによって構成される個人の伝記である．

オーラル・ヒストリーも含めライフストーリーは，助産師[49]や被差別部落の住人[50]，被爆者[51]や非被爆の原爆体験継承者[52]，自閉症患者[53]や精神疾患を持つ子どもの親[54]，HIV 陽性者[55]や石垣島でパイナップル農園を営む台湾移民[56]，ハンセン病者[57]や摂食障害を持つ女性[58]，ドメスティック・バイオレンス被害者[59]やひきこもりの若者[60]，帰国子女[61]や日本語学習者[62]など，対象の範囲は無限である．またテーマの範囲も無限である．量的研究では触れることが難しい，「なぜ」「どうして」「どのように」の部分を，対象者自身の言葉を通じて知ろうとする姿勢を持ち，その知見を調査結果として提示するだけではなく，そこに至るまでの調査過程をも描き出すスタイルを持つ．したがってオーラル・ヒストリーやライフストーリーの研究論文は，必然的に物語風になり，記述は分厚くなる．そうしながら政治家でも有名人でもない一般市民の経験の語りから，今まで記録されたことのない生（ライフ）のストーリーを通じて，その人が生きた社会や文化の姿や変容過程を全体的に読み解こうとする．そうすることで，最終的に社会の課題を浮かび上がらせる[63]．オーラル･ヒストリーは『戦後政治の証言者たち』[64]や『首相官邸の決断』[65]，首相退任後 10 年以上経って「原発ゼロ」運動を推進する小泉元首相を取材した常井の『決断のとき-トモダチ作戦と涙の基金』[66]などの公人を主題においた作品が多いが，決して対象を公人のみに限定する研究法ではない．

小倉（2011）はライフストーリー研究の特質として，「生への全体性への接近」を挙げる．『人間の「生（life）」を，たとえば「行為」や「役割」「階級」「パーソナリティ」といった要素や，「逸脱者」といったカテゴリーに還元して理解するのではなく，さまざまな関係性が集積した，個人の人生という時間性における経験の全体性（流れ･連鎖）から物語的に理解していくアプローチである』（138）[67]とする．またインタビューで聞き取る「語り」からその人の考え方や生き方だけをただ取り出すのではなく，語りの内容に加えて，なぜその発言がそのように発話されるに至ったのか，その人の人生における過程と，語りの内容が活かされている関係性こそを理解しようとする姿勢を挙げている．つまり「語り」で語られている内容を唯一の社会的「真実」として科学的に求めるものではない．また数量的に語りの真実性や妥当性を証明するものでもない．

本稿ではバルバドスのヨーロッパ系市民の経験の事例としてインタビューを行った 2 名の語りの一部を引用し分析する．彼らの語りは彼らそれぞれの経験についてであって，決してバルバドスのヨーロッパ系市民の経験を総代表するものではないことを強調する．そうであっても，彼らの経験の語りは決して無意味ではない．彼らの経験は社会における「他者との関係性の累積」からなるため，彼らの経験の語りを聞くことで，彼らがどのような社会的環境でどのような社会構成員とどのような相互行為を行ってきたのかが見えるようになる．今まで聞かれることのなかったヨーロッパ系市民の経験の語りは貴重な情報に溢れており，バルバドス社会の全像は明らかにならないが，新たな知識をもとに多角的な視点を得ながら理解を深めることができる．

3.2. 現地調査

(1) インタビュー対象者

本稿では植民地時代を経験した 60 代後半のウェイン（仮名・元外交官・コラムニスト）と今どきの若者らしい言動をとる 20 代後半のリチャード（仮名・自営業）の事例を掲示する．ウェインとリチャードは，3 世代以上カリブ海地域に住む家系出身であり，「白人」であると自己認識し，他者からも「白人」であると認識されている．彼ら 2 人とは，筆者の知人の紹介で知り合ったバルバドス在住アフリカ系バルバドス人の現地調査協力者を起点とする雪だるま式サンプリングでつながった．

雪だるま式サンプリングを行った際には，バルバドスのヨーロッパ系市民として「いつ・どのような経験をして白人であると認識したか」を聞き取るインタビュー対象者を求めていると説明した．本稿でウェインとリチャードの 2 人を取り上げる理由は，2 人とも最初のコンタクト時に二つ返事でインタビュー参加を快諾してくれたことである．

雪だるま式サンプリングで連絡を取った一部の人々は，インタビュー内容がバルバドスの「人種」や「社会不平等」，「差別」や「混血」に関係することだと知るや否や，「パンドラの箱を開けてしまうから」とインタビューを即座に固辞した．筆者が詳しく聞くと，「（調査者である筆者に）悪意はないのだろうけれど，インタビュー内容は現代のバルバドス社会で平和的に暮らす自分たちにとってはセンシティブなテーマであり，周りの人たちに白人至上主義者や人種差別主義者として誤解される心配があるから」といった主旨であった．またインタビュー内容を吟味してインタビュー参加可否を回答すると述べた人々は，現地調査協力者の連絡に対してインタビュー可否を回答した．したがって雪だるま式サンプリングで声がかかった人の大半は，「非常に興味深い内容だが自分の参加は控えたい」という回答をした．そのような中でインタビュー内容詳細を確認することもなく，即座に快諾したこのウェインとリチャードは特別な存在だった．

ウェインとリチャードを取り上げた二つ目の理由は，彼ら 2 人は共に中流階層出身だが，成人後の職業がウェインは世界を飛び回る外交官として非常にインターナショナル，他方リチャードは海外旅行にも出かけないバルバドスで仕事が完結するフリーランスのデザイナーとして非常にドメスティックと正反対なことである．筆者は彼ら 2 人がそれぞれ培ってきた経験の違いがバルバドス社会を俯瞰する際の視座の違いとなって表れるはずであると推測したため，まったく異なる職業を持つ彼ら 2 人を選んだ．

そして年齢の違いも彼ら 2 人を取り上げた理由である．たった 2 人の事例を取り上げてもバルバドス社会が変容してきた全貌を見ることはできないであろう．しかし筆者は人格の基礎が形成される思春期をまったく違う年代に過ごした彼ら 2 人の経験からバルバドス社会の移り変わりの一部を垣間見ることができるのではないかと考えた．

加えて，彼ら 2 人のインタビューに対する姿勢が非常に真摯なもので，深い語りを聞き取ることができたこともこの 2 人を本稿で取り上げた理由である．インタビュー対象者の中には答えをはぐらかしたり，回答内容がインタビューの最初と最後で一致していなかったりした者もいた．そのインタビューに対する姿勢は研究対象としては興味深いが，本稿はバルバドスのヨーロッパ系市民が「いつ・どのような経験をして白人であると認識したか」という問いから，個人の経験に加えて，その経験が示唆すること，それを実践するために必要なことを導きだし，バルバドス社会を多角的に理解することを目的としている．そのため本稿は深い語りを聞き取ることができたウェインとリチャードの 2 人を分析対象とした．

(2) インタビュー概要

ウェインとリチャードの連絡先を入手してからすぐに，筆者の人物紹介や先行研究の電子データ，現地調査の概要を電子メールで送付した．そして聞き取り調査はデリケートな質問事項を多く含むが，完全な匿名性が保たれること，合意のもと IC レコーダーで録音すること，録音したデータは匿名で文字起こしされること，文字起こしされた内容は英文や和文の論文に引用され発表されることを説明し，インタビューの合意を得た．

2016 年と 2017 年にバルバドスで行ったオーラル・ヒストリー・インタビューでは，軸となる質問を一つ用意した．それは「いつ・どのような経験をして白人であると認識しましたか」というものだ．その上で，ウェインやリチャードが何から話し始めたらよいのかと途方に暮れたり，話しづらそうな雰囲気になったりした場合にだけ，用意してあ

ったいくつかの補助質問を段階的に示した．ウェインとリチャードは約 2 時間語り続けた．2021 年と 2022 年には確認や追加インタビューのため，再度のインタビューをオンラインで行い，メールでもやり取りを行った．

(3) 主な質問事項

本調査では，いつ・どのような経験をして白人であると認識したかを質問し，この点にまつわる代表的なエピソードを促した．筆者は「いつ・どのような経験をして白人であると認識しましたか」と質問されたインタビュー対象者が，即座によどみなく，自身の経験を滔々と回答することは難しいと考えている．通常は「えーっと・・・こんなことでいいのかな？」と調査者の反応を伺いながら語り始め，調査者の頷きや首を傾げた姿，語りを促す「合いの手」から自身の回答が決して的を外れた回答ではないこと，そしてどのような回答をしても調査者に反論されたり非難されたりしないことを確認して，ようやく安心して語り始めるものである．

さらにオーラル・ヒストリー・インタビューやライフストーリー・インタビューは語り手の自由な語りを重視するあまり，漠然とした質問になりがちである．そのため上記のように筆者の先行研究インタビューでもインタビュー対象者が困惑し答えにつまる場面が少なくなかった．そういった時に回答を促すために補助質問を投げかけると，それが呼び水となり，一気に流れるような，そしてその人でないと語ることができない具体的でユニークな語りが展開されるようになるのである．

現代フランスのエリートを対象にライフストーリー・インタビューを行った山﨑（2022）も，まず「子供のころから，あなたがどのようにフランス語の『言語資本』を獲得したのか自由に話していただけませんか？」と質問をして，インタビュー対象者が答えに詰まったり語りが止まったりした場合に限り，「フランス語能力の習得に向けた学習に関して，あなたは特に先生，友だち，両親，兄弟，姉妹によって影響を受けたと思っていますか？どのような点について」などの具体的な補助質問を提示して，それをヒントとしてさらなる語りを促している[68]．これはインタビュー対象者の語りを促すことに加えて，桜井（2011）が言うように，インタビュー対象者の自発的な発話や自由な回答を尊重しつつも，どのインタビュー対象者からも聞き取りたい基本的な共通の項目に関する質問は用意し，全体としての質問の流れを調査者である筆者がある程度は統制しておきたいからでもある[69]．

したがって本調査では，「いつ・どのような経験をして白人であると認識しましたか」という質問に対して自発的な語りが共有されなかった場合にのみ，①家族史，②家族の伝統，③通学した学校での先生や同級生との関係や様々な体験，④子どもの有無，⑤結婚や配偶者の属性，⑥今まで交際したことのある相手の属性，⑦異人種間結婚と混血についての意見，⑧いつ自分がヨーロッパ系白人だと認識し始めたか，⑨アフリカ系やインド系の人々との交流，⑩今まで受けてきた人種差別，⑪今までしてきたと認識している人種差別について，といった補助質問を段階的に投げかけた．つまり以上の補助質問内容は筆者がどのインタビュー対象者からも聞き取りたい共通の項目であった．

基本的な質問事項は上記のとおりだが，オーラル・ヒストリー・インタビューは，聞き取りの内容もその順番も不定形で，聞き取りの相互行為を通じて質問や応答がなされる．そのため状況に応じて上記以外の質問も頻繁に行った．

3.3. 筆者の立場

遠く離れた日本からバルバドスを訪問していた「部外者」である筆者の立場は比較的有利に働いた．ウェインとリチャードは，「部外者」だからこのことは知らないだろう，だから説明する必要があると，より丁寧で詳細な説明をしてくれた．そして大抵その内容はウェインとリチャードが経験した「事実」や，知るところの「史実」に対する独自解釈を大いに含有しており，事実・史実に対するウェインとリチャードの視点を伝えてくれた．

また筆者がカリブ海地域出身のヨーロッパ系市民でもなく，アフリカ系でもなく，現地在住者でもない遠く離れた東アジアの「部外者」であるという事実は，ウェインとリチャードに一種の安心感を与えたであろう．例えば，筆者がカリブ海地域のヨーロッパ系市民であったら，ある程度は同質の家族史を共有していたり，狭いカリブ海地域のヨーロッパ系コミュニティの延長で共通の知人が存在したり，語り手の名前は明かさない語りの引用であっても匿名性が保証されない可能性はあり，本音を語る心理的負担は大きいと考えられる．

他方で，例えば筆者がアフリカ系であったら，アフリカ系市民に対する嫌悪やアフリカ系市民に対して行った人種差別の経験などは言及しにくいであろう．そのため筆者は，日本人でカリブ海地域の「部外者」である調査者だからこそ，ヨーロッパ系やアフリカ系の研究者が行う聞き取り調査では得られない語りを入手可能だと自負している．

4．「白人」としての認識と経験

ヨーロッパ系市民であるという認識は，自分を中心に，自らとは異なる非ヨーロッパ系市民を「他者」として認識して初めて生まれるものである．つまり人口の 9 割以上をアフリカ系が占めるバルバドスにおいては，ヨーロッパ系市民がアフリカ系市民の黒人としての異質性に気づき，他者と認識することで，その対照の存在としての自身の白人性に気づくことになる．この異質性への気づきは肌の色の違いを認知することだけに留まらず，文化的・社会的・経済的・政治的な，何かしらの決定的な違いをも識別するものである．とはいえ，自らを白人と認識したとしても，ある特定の社会において白人として承認され，同質の白人として白人コミュニティに受け入れられるとは限らない．白人コミュニティへのアクセス，つまりその社会で白人として扱われるかどうか，また白人としての言動が許されるかどうかは社会ごとに異なる基準が存在する．

バルバドスから 330km 南方に位置するトリニダードのフランス系市民を対象とした筆者の先行研究 “French Creoles in Trinidad: Constructing and Reproducing Whiteness” (2006)[70]や“Constructing and reproducing whiteness: An oral history of French Creoles in Trinidad” (2016)[71]では，フランス系トリニダード人は一概に白人としての純血性を誇り，ヨーロッパ系以外の混血の可能性を徹底的に否定することを確認した．しかしバルバドスのヨーロッパ系市民を対象とした筆者の先行研究「旧英領カリブ海地域における白人性の多様性」(2018) [72]や“Questioning whiteness: ‘who is white?’ -A case study of Barbados and Trinidad-” (2019) [73]は，バルバドスにおいては混血の事実が明らかでも身体的特徴が白人であればヨーロッパ系市民であると認識されることを明らかにした．

本稿では，先行研究を踏まえ，バルバドスのヨーロッパ系市民自身が，いつ・どのような経験をして白人であると認識してきたのかを探るため以下の語りを検討する．

4.1. ウェイン　60 代後半　男性

「知りうる限りヨーロッパ系 100%純血」と自身を説明したウェインの身体的特徴にはまったく混血の様子は見られない．ウェインはバルバドスの外交官であった．退職後はバルバドスの二大紙のコラム欄やラジオ番組を担当してきた．バルバドスのみならずカリブ海地域では著名な，人種間の軋轢を超えた社会統合推進を主張する人物である．対面インタビューはウェインの自宅で行った．

バルバドスにおいて一般的に「バルバドス人」といった場合には，主にアフリカ系バルバドス人を指し，ヨーロッパ系バルバドス人については，「白いバルバドス人（white Bajan）」や「バルバドスの白人（Bajan white）」と呼ばれ，ただの「バルバドス人」とは呼ばれない．これはアフリカ系バルバドス人を基準とし，それ以外の属性を持つバルバドス人を特別な存在として強調するものである．ウェインはアフリカ系やヨーロッパ系バルバドス人の黒人や白人といった肌の色を基準とした区別を止めて，「バルバドス人」としての国民融合を訴えている．

ウェインは自分が「バルバドスの白人」として広く知られていることを認識している．そのため特徴的な経験をしてきた自身の語りの引用は匿名性を保てないと確信していた．しかしヨーロッパ系市民としての経験を共有することでバルバドス社会に対する理解が深まれば嬉しいとして，語りの信頼性が増すなら論文には匿名ではなく本名を記載しても構わないと発言した．確かにバルバドスを多少とも知る人が読めば，本稿における「ウェイン」が誰のことであるか，容易に想像できてしまうであろう．しかし本稿では，他の語り提供者との平等性を保つため，ウェインという仮名を用い，彼の語りを引用することにした．

ウェインは外交官としてのキャリアを終え，グローバルな経験に基づく視点から，数多くの執筆をしてきた．その内容は植民地支配から解放され約 60 年が経っても未だに乗り越えることのできない，カリブ海地域における人種間の軋轢や，社会の不平等に関するテーマが多い．それらの作品には「カリブ海地域のヨーロッパ系市民」としてのウェインの強い自己認識を垣間見ることができ

る．バルバドスの日刊紙などの紙面で広く紹介される歯に衣着せぬウェインの発言は，植民地として支配され続けてきた経験に起因するバルバドス人の特殊なメンタリティと，それに影響を受けているバルバドスの独特な人種関係を鋭く指摘している．そしてその実態を踏まえて，バルバドスの未来について温かい目で社会を良い方向に変えようとするウェインの姿がある．

ウェインが幼少期を送った独立前のバルバドスは，白人プランテーション領主と彼らの財産としてのアフリカ人奴隷の関係が，バルバドスを構成するすべての人の精神的・制度的な価値観として根強く残っており，人種差別はごく自然に存在していた．ヨーロッパ系市民は政治・経済・文化的活動に関してアフリカ系市民が持ち得ないあらゆる社会特権を持っていたが，それも自然なことであった．アフリカ系市民がそういった環境に対して強く対抗した記録は多くは残っていない[74]．アフリカ系市民はヨーロッパ系市民を敵に回して対抗するよりも，ヨーロッパ系市民に取り入ることを選んだ．そうすることでアフリカ系市民はヨーロッパ系市民が享受する社会特権のおこぼれにありつくことができたからだ[75]．

ウェインが青少年期を送った独立直後のバルバドスは，政治的な発言を行う教育を受けたアフリカ系市民の存在が目立ってきた時期だ．公然と「白人オンリー」だったクリケットやサッカーのチーム，歴史ある社交クラブはそのポリシーを外した．そうしても，「白人オンリー」の性格は十分に残っていたが，アフリカ系の政治家が出入りするようにもなっていった．とはいえ，日常生活ではアフリカ系市民は通行できない住宅街や，アフリカ系市民は歓迎されない店，アフリカ系市民は就職できない職種，アフリカ系市民は店を構えても入り口を大通りに面して設置できないなど暗黙の掟は存在し続けた[76]．

現代のバルバドス人は，肌の色に基づく人種間の不平等について言及することが人種間の融合を妨げるとして，まるですでに平和な人種的融合を果たした社会が展開されているかのように振る舞う．しかし人種差別や肌の色に基づく社会不平等は疑いようもなく現実として存在する．アフリカ系市民は虐げられていると不満を募らせる．他方，ヨーロッパ系市民はその原因に加担しているとアフリカ系市民に非難されるかもしれないと不安を募らせる．積もり続けた不満と不安は，いつか爆発し，社会に壊滅的な被害をもたらす．ウェインはその不満や不安について，歴史を正視し，日頃からバルバドス人が抱く不満・不安を社会で共有しながら建設的な対話を行い，真の社会統合を目指すのが得策であるとする．

現在そのような発言を行うウェインが自分をヨーロッパ系白人だと認識し始め，社会の不平等に気づき始めた背景を以下のように語った．

「私はプランテーションで生まれたので，自然とまわりに黒人の子どもたちがたくさんいた．今だからこそ自分が白人で他が黒人だと認識しているけれど，子どもの頃はその違いを知らなかった．」

子どもの頃は肌の色の違いに気づかなかったということですか？

「うーん・・・いや，視覚として肌の色が違うということは知っていたと思う．だけど肌の色が持つ意味，というか，肌の色が違うから守らなければいけない決まりや超えてはいけない境界線があることは知らなかった・・・例えば，黒人の子ども同士ではお互いの家を行き来して遊びに行っていたけれど，私は黒人の友だちの家には行かなかった．行けなかったのか，行くべきではないという暗黙のルールを私は幼いながらに肌で感じ取っていたのかもしれない．とにかく私は黒人の友だちの家に遊びに行かなかったし，黒人の友だちも我が家には遊びに来ていなかったことは記憶している．」

なぜ黒人は白人の家に，白人は黒人の家に遊びに行ってはいけなかったのでしょうか．

「よくわからない．よくわからないけど，よくある一般民衆レベルの人種分離の暗黙の決まりごとだろうね．こうやって覚えているということは，当時も不思議に思ったのだろうね．それで何が起こっていたかというと，たとえ嵐や雷雨でも，私と黒人の友だちは屋外でしか一緒に遊べなかったわけだ．ずぶぬれになってね．」

ウェインは，父親の職業について，「プランテーション監督人をしていた」と言った．そして次の

瞬間，「残酷な奴隷所有者じゃないよ」と冗談めいて言った．その発言はプランテーション所有層ではなく，その下部に位置する階層に属す家系であることを暗示した．監督人は伝統的に白人や肌の色が薄い混血の者が就く，プランテーション領主に絶大な信頼を置かれている職業である．ウェインは，両親の家系ともにバルバドスに移住してきた経緯は不明だがアイルランド系であることは確か，年季契約労働者ではなかったと思うと述べた．非人道的な方法で奴隷所有や搾取をした親ではないことを冗談めきながら強調していたが，そもそもウェインの父親がプランテーションで働いていた 20 世紀初頭には既に奴隷制は廃止されていた．ヨーロッパ系市民が何世代にもわたって背負わされ続けている奴隷所有者としてのレッテルを先制して避ける姿は，日常的に「社会悪」とされてきた経験の蓄積を感じさせる．自己防衛本能に基づいてのことか，とっさに冗談として茶化しながら「奴隷所有者の子孫である」というヨーロッパ系市民に対するよくある偏見を否定した．

また屋外で一緒に遊ぶ友だちのうち，肌の色が黒い友だち同士は家の行き来ができて，肌の色が白い自分だけはその行き来を傍から見ることしかできなかった．その学齢前の記憶をウェインはよく覚えていた．子どもながらに寂しい思いをしたに違いない．正式な規則は存在しないが，アフリカ系市民とヨーロッパ系市民が共存するため一般民衆レベルで不文律が作られ，自発的にアフリカ系市民とヨーロッパ系市民の分離が行われていたことがわかる．大人社会の自発的な人種分離については言及されることが少なからずあるが，植民地における学齢前の子ども社会の人種分離に関する経験を聞くのは珍しい．

「人種に気づいた…というより，自分が白人だと気づいたのは，おそらく 10 代だったと思う．私はバルバドスに存在するすべてのヨーロッパ系の子女が通っていた私立の小学校に通っていた．当時の友だちは，両親の友だちの息子や娘たちで，すべての友だちが白人だったのを覚えている．だからヨーロッパ系以外の人たちとの関わりはほとんどなかったんだ．そして 10 代になったとき，公立中学校に入学して，白人が全校生徒の中で自分一人という状況になって初めて，やっと自分が周りと違うことに気づいたんだよ．そして同時に，社会の不平等や色々なことにも気づき始めたんだ．だから本を読んで社会の不平等について勉強し始めて，社会の現状に対してとても反抗的になったんだ．奨学金をもらえたからイギリスに留学したけど，バルバドスから離れた頃は世の中の不条理にとても敏感な青年だった．もし当時，バルバドスにずっといたら，間違いなく自分は気が狂っていたと思う．それほど当時のバルバドス社会の不平等や不条理が許せなかったんだ．」

植民地時代を経験した世代である 60 代後半のウェインの，10 代で自分がヨーロッパ系白人だと認識したとの語りは興味深い．しかしウェインはそれまでに黒い肌の人々を目にしたことがある．前述の遊び仲間の黒人の子どもたちが彼の語りで出てきた最初のアフリカ系市民である．また中流階層の出身というウェインの家庭に，家事や育児を手伝う，いわゆるメイドはいたはずで，そのメイドは当時のバルバドス社会のコンテクストから判断する限りアフリカ系であったはずである．メイドの存在について聞いてみると，しばらく考え，「そうだね，確かにアフリカ系の女性が家にいた！」と驚いたように述べた．そしてリチャードは，身近にいた黒い肌のアフリカ系女性の身体的特徴と対比して，なぜ自身が白い肌を持つ白人であると自己認識をしなかったのか，興味深そうに考えていた．

自身が通った小学校にバルバドスに住む「すべてのヨーロッパ系の子女が通っていた」との表現にはある程度の誇張が含まれているであろう．なぜならバルバドスの上流家庭の子どもは幼少期からイギリスなどヨーロッパのボーディングスクールに送られることが往々にしてあったからである．したがって，「ウェインの両親が交流を持つ階層のヨーロッパ系家庭の子どものほとんどが通っていた」という表現が正しいのではないか．ウェインは自身を中流階層出身と述べており，当時のウェイン少年の世界観は，両親の階層や行動範囲に制限されていたといえる．

学業成績が優れていたため，ウェインはバルバドスでトップレベルの中学校に進学した．その中学校はウェイン以外すべてが非ヨーロッパ系の生徒で，クラスメイトが全員ヨーロッパ系白人の小

学校から進学してきたウェインにとっては大きな環境の変化であった．そしてその環境で人種差別や不平等に気づいたという．「今のバルバドスからは考えられないけれど」と前置きをした上で，「1950 年代のバルバドスはカリブ海地域で人種差別や社会的不平等が一番酷かった」と述べた．そうであったから「バルバドスはカリブ海地域で白人であることに最高の価値を置く島で，白人のために存在する島だった」と語った．

どんなに頑張って優秀な学業成績を収めても，非ヨーロッパ系はヨーロッパ系よりも上位の職位に就くことができない．そのような当時のバルバドス社会で蔓延する人種差別や社会的不平等に我慢ならなくなり，ウェインは奨学金を得て，英国最古のオックスフォード大学に留学した．中流階層出身であるウェインが大学教育を受ける唯一の方法は奨学金を得て欧米に留学することであった．

ウェインが大学進学を希望した 1950 年代，バルバドスには学位取得が可能な高等教育機関は存在しなかった．前述にもあるとおり，バルバドスの良家の子どもたち，つまりプランテーション所有層であるヨーロッパ系の子どもたちは，中学校やそれ以前から宗主国である英国のボーディングスクールに通い，そのまま英国の大学に進学していた．そのため，プランテーション所有層でない人々の高等教育の機会やその必要性は真剣に議論されることはなかったのであろう．したがってウェインはその英国で，英国植民地としての母国バルバドスに構築されてしまった，人種を基準にした社会階層とその階層に応じた富と機会の不平等な分配の事実について考えたという．

> *「自分の直接の責任ではないけれど…白人と黒人の二つの大きな人種グループに，ここまで根深い精神的断絶があること，その状態を改善することに，白人である自分が貢献できるかもしれないと思った．どう考えたって自分たち白人は社会的に恵まれているし，責任があるからね．」*

ウェインはこの語りの中で多くを認めた．バルバドス社会において，人種による断絶が存在すること，人種による差別・不平等が存在すること，自らが差別する側，不平等な関係性で特権を受ける側に属すること，それらの原因に対し直接の責任はないもののヨーロッパ系だから責任があると自覚していることを明言した．

植民地時代から変わることなく人種差別や社会的不平等が続くバルバドスから逃れたはずであったが，ウェインの留学先であるオックスフォード大学には英国植民地経営で築かれた多額の資産を原資として建てられた大学施設が数多く存在する．その中でも特に言及すべきは，バルバドスとバーブーダでプランテーション経営を行なっていたコドリントン家から莫大な寄附を受けたオール・ソウルズ・カレッジである．バルバドスから逃れたはずであったのに，ウェインが学業に励んだ環境は，バルバドスで酷使されたアフリカ人奴隷，「白い奴隷」や「プアーホワイト」の労働力によって築かれたものであった．

ウェインが学生だった時代から約 60 年経ち，2020 年 5 月にはアフリカ系の人々に対する構造的人種差別の撤廃を求める Black Lives Matter 運動が世界的な動きをみた．その時節，オール・ソウルズ・カレッジは「オール・ソウルズ・カレッジとコドリントン家のレガシー」と題するコメントを彼らのウェブサイトに発表した[77]．それはコドリントン家の財産は「西インド諸島のプランテーションでアフリカの人々を奴隷として働かせた活動によるものである」と初めて明記したものだった．そしてカレッジ図書館の入り口に「西インド諸島のコドリントン家所有プランテーションで奴隷として働かされていたすべての人を忍んで」と書かれた記念碑を設置した．

そのようなオール・ソウルズ・カレッジの動きは不十分であると一蹴したのは，オックスフォード大学の脱植民地化，つまり植民地時代の影響を認識し特に学内における人種差別撤廃を目指す学生や卒業生から構成される団体「コモン・グラウンド・オックスフォード」であった．彼らは「コドリントン家のレガシーとは，構造的な，子どもや女性，男性の人身売買や大量虐殺によって蓄積された富である．この事実は，当該者の子孫だけでなく，すべてのアフリカ系・カリブ系の人々に何代にもわたる精神的外傷をもたらしている」として，声明発表だけでなく，「奴隷制度反対を示すための行動」が必要であるとするプレスリリースを行った[78]．

オール・ソウルズ・カレッジのコメントでみるように，植民地の力構造において「白人対黒人」と

いうナラティブが主流の中，植民の過程で絶滅した先住民にも言及したコモン・グラウンド・オックスフォードの姿勢は新しい．しかしここで指摘すべき点は，構造的な性搾取[79]，人身売買[80]や大量虐殺の被害者[81]としてのヨーロッパ系の人々が認識されていないことである．アフリカ系と先住民であるカリブ系の人々を被害者とし，ヨーロッパ系を加害者とする一方的なレトリックが続く限り，真の脱植民地化や社会統合は進まない．

外交官としてバルバドスを代表する立場で国際的に仕事をしてきたウェインは，開発途上国の国際会議にバルバドス代表として参加していた際，時に逆人種差別を受けたと打ち明けた．開発途上国の代表として国際会議に参加してくるのは，多くが南半球出身で非ヨーロッパ系の人々である．そのため，どこから見ても白人であるウェインは，白人に対する蔑称で呼ばれたり，先進国側から送られてきた開発途上国の融合を阻みにきたスパイであると面と向かって暴言を吐かれたり，ヨーロッパ系白人であるがゆえの様々な嫌がらせを受けてきたという．

肌が白い人々が押しつけられてきた植民地時代の出来事に対する罪の意識．そして白い肌を持つことで恩恵を受けられるシステムが根強く浸透している現代社会における人種間不平等に対する責任．これらを感じ続けるのは重く辛い．ウェインはバルバドス社会におけるヨーロッパ系市民としての生きづらさを示唆する．とはいえ，国際場裡で逆人種差別を経験したという発言がある一方で，バルバドス社会で面と向かって暴言を吐かれたり，これらの罪の意識を強制されたりするような経験の語りがウェインから一切出てこないことは興味深い．現実として直接的に誰もウェインに対し謝罪や賠償を要求しておらず，罪や責任を追及していないのである．それにも関わらず，ウェインは罪と責任の意識を持ち続けている．

ウェインはヨーロッパ系市民に対し，負っている罪や責任の意識の重さを公言しようと呼びかけている．この重さこそが，バルバドス社会のヨーロッパ系市民であるという認識を強固なものにし，これ以上に重さを感じないよう防御態勢に入らせ，アフリカ系市民に対して頑なな態度をとるようになり，結果として人種による社会の断絶が続く原因となるという．ウェインは，過去はどうであれ白人も黒人も平等なバルバドス人であるという認識を持たないと，今後バルバドスは国として真の発展をみることはないと危機感を抱く．その姿からは，恵まれてきた自分自身の経験を深く認識すると同時に，その恵まれた環境に疑問を持ち，ヨーロッパ系市民が優遇される社会，またヨーロッパ系市民を優遇することを容認している社会を是正しようとする強い意識を感じる．

ウェインのこのような姿勢は，1940 年代の政治家「“TT” ルイス」も共有していた[82]．ヨーロッパ系でも労働者階級出身のルイスは，人種を越えたバルバドスの社会統合を目指して，アフリカ系市民と社会運動を行った．多くのヨーロッパ系市民にとってルイスは煙たい存在であったようだが，筆者が今までにインタビューを行ったバルバドスのヨーロッパ系市民の中には，ルイスの名を挙げて彼の運動に共感を示し，ウェインと同様の主張をする者は何人か存在した．彼らのほとんどは中流階層以下出身で，現在のバルバドス社会で一定の地位を築いている著名な者たちであった．また完全な白人の身体的特徴を持つヨーロッパ系市民が，筆者に自身が混血である事実を打ち明け，「自分の白い血の部分で自分の黒い血の部分に謝らざるを得ないほど」ヨーロッパ系市民しか享受できない社会特権に対して罪悪感を持つと告白したこともある．このようにバルバドスのヨーロッパ系市民の中には白い肌を持つだけで社会特権を享受していることに後ろめたい気持ちを抱き，それが当たり前となっている社会を変えようと考える者も決して少なくないのである．

ウェインは自分の「家庭に一つの世界がある」と冗談めかして言った．自分の配偶者はトリニダード出身でヨーロッパ，アフリカ，中国，カリブ海先住民，中東，インドの混血であり，迎え入れた養子も同様に「7 大陸が揃った」混血だという．この発言を聞くまで筆者は，ウェインが人種主義的思考を持ちながらも，非ヨーロッパ系市民との軋轢を回避するため，そして国際的な人権主義者であると見栄を張るため，人種融合を唱えているのかもしれないと疑いを持っていた．しかし配偶者が混血であると聞いてから，筆者はウェインの信条は本気なのだと理解した．人種差別主義者であったら，決して混血の配偶者は選ばないであろう．

4.2. リチャード　20 代後半　男性

次に紹介するリチャードは，ブロンドに青い目の 20 代後半の男性である．リチャードは自身を「両親共に白人だから，たぶん 100%白人」だと紹介した．勉強は好きでも得意でもなかったため大学へは進学せずに，好きなアートを仕事にしようとグラフィック・デザイナーとしてフリーランスで働いている．

リチャードが生まれ育った 1980 年代以降のバルバドスは，根強い人種差別は存在するものの，アフリカ系文化を前面的に押し出す社会が形成されてきたため，人種差別の実態は見えない上にそれが日常になっていた．そして肌の色「黒」の濃淡はあるが，バルバドスの政治家はほぼ 100%がアフリカ系になった．しかしあらゆる政策の陰にはヨーロッパ系の影響力が強く存在する．なぜなら最も農業に適した広大な土地を所有し，砂糖産業，観光業，流通業などバルバドス経済の根幹を独占しつづけている[83]ヨーロッパ系市民の利権を決して無視することはできないからだ．他の誰にも真似できない潤沢な政治献金を行うヨーロッパ系市民の意向は必然的に重視されるようになる[84]．

現代のバルバドス社会にも実質的に「白人オンリー」の場所は存在し，見えないけれども確実に人種差別は存在する．とはいえ前述のウェインが青少年期を過ごした時代と異なるのは，混血のバルバドス人が増加し，アフリカ系市民が教育を修め経済力を付けたことである[85]．混血の存在はバルバドス社会の人種差別を緩和することはなく，黒色や白色の濃淡の程度といった，「完全な黒」や「完全な白」以外の肌の色による階層を生み出した．加えて，「完全な白」の存続が難しいという理解が進んだことも確かである．「白い方が優れている」という植民地時代の精神が残っていたとしても，混血が進んだ結果，ヨーロッパ系市民とアフリカ系市民の境界が不鮮明になり，「正真正銘の白人」が不確定となり，ヨーロッパ系市民という理由だけで問答無用に優遇されるという機会は減っているようである．

リチャードがインタビューの場所に指定してきたのはショッピングモールの屋外スペースの一角であった．リチャードが顧客とのミーティングによく利用する場所だという．大きな日傘が頭上を覆う木製のテーブルを挟んで向かい合わせの二つのベンチに腰掛けてインタビューへの合意に謝意を伝え，インタビューの意図を再確認して，インタビューを始めた．しかし開始直後から，自身について「普通のバルバドス人だけど白いだけ」と複数回発言したり，「普通の」家庭出身だと述べ，「それを中流と呼ぶなら，そうなのかも」と自身の家庭環境を他と比較し社会の中で相対的に位置づけることに関心がないことを伝えてきたり，ヨーロッパ系市民であることは認識するものの，あえてその事実を強調する意図がないことを明確に示してきた．

リチャードはバルバドス在住アフリカ系バルバドス人である現地調査協力者の知人の知人であり，調査協力者を通じて数ヶ月前からインタビューの意図を伝えて確約を取った．インタビューは直前まで日時と場所の調整を重ねてやっと実現した．インタビューを拒否したければいくらでも断るタイミングはあったので，筆者は合意のもとにインタビューまでこぎ着けたはずだと信じている．しかしあまりにヨーロッパ系市民であることを強調したくない雰囲気が口調に漂っていたので，再確認としてインタビューの意図と研究計画を伝え，インタビューさせていただけるのは嬉しいが，決して強要はしたくない旨を伝えた．

するとリチャードは「うん，聞いたよ．わかっているよ．聞きたいことを答えられるかわからないけれど，僕でよければ喜んで調査に参加したい」と言った．ここで筆者は「聞きたいことを答えられるかわからない」の発言部分に反応した．これはリチャードが察する，筆者がリチャードの発言として記録したいであろう内容の回答は嘘をついてまではできないという意味なのか，ただ単に A に対する B という回答は B を知らないから回答できないという意味なのか判明しかねた．筆者が深読みをし過ぎているかもしれなかったが，「誰でもないあなたのヨーロッパ系市民としての経験をあなた自身の言葉で知りたい」と伝え，「知り合いの話を自分が経験したこととして教えてくれるとか，海外から来た研究者が知りたいのはこれかなとか，わざわざ答えを創作してくれなくていいのよ」と伝えた．彼の反応は，長い吐息の後に「オーケー」の一言であった．

この肩肘を張ったリチャードの状態を打破すべく，アイスブレーキングとして筆者のインタビューの失敗話をしているとリチャードは声を上げて笑ってくれるようになった．この声に気づいたフ

ードコートのアフリカ系清掃員が様子を見にやってきた．リチャードと顔見知りらしく，親しそうに拳を軽くぶつけ合うフィスト・バンプで挨拶しながら，「このリチャードはね，見た目は白人だけど白人じゃないよ」と言う．「どういうこと？」と問うと，「人種差別主義者じゃないから俺らの友だちなんだ．リッチーは偽りがないから，兄弟みたいなものだよ」と言った．「人種差別主義者でない・偽りのない・兄弟みたいな友だち」のリチャードに，アフリカ系清掃員は「しっかりバルバドスの白人世界を代表するんだぞ」と言い残して立ち去った．リチャードは片手を挙げて応えたが，筆者は「白人世界の一般的な説明もありがたいけれど，まずはあなた自身の経験を知りたい」と再度伝え，いつ自身が白人であると気づいたかを聞いた．

リチャードは 10~11 歳のとき，夏期講習のために日ごろ通っていた学校とは別の学校に通い始めた．そのときに，自らとは異なるグループに属す「他者」に気づき，自分は彼ら「他者」とは違うと気づいたという．肌の色や「人間の優越」に先入観を持たない子どもの「人種」を認識する過程を語りに見るのは非常に興味深い．それをリチャード自身も認識しており，「これが人種の存在に気づいた，つまり自分は白人だと知ることになった事件だった」として，「カミナリが直撃したようだった」と当時の衝撃を表現した．以下の引用は筆者が相槌を打てないほど，少しのいいよどみも迷いもなく，そして時に思い出すように宙を見つめて一気に発言したリチャードの語りである．

> *「僕は自分が他の子とは違うとは気づいていたとは思うんだれど，それが何の違いなのかはわかっていなかったんだ．それか，他の子が僕と違うということを気づいていたとは思う．10～11 歳のとき，ある試験対策のために男子だけのサマースクールに通わなければならなかったんだ．そのとき，僕だけが白くて，僕以外のすべての男子は黒かった．で，僕はお母さんに『ここの男子は全員，丸刈りで黒い目をしている』と驚いて報告したのを覚えている．まさにそこで，強い統一感を感じたんだ．当時通っていた白人と黒人の生徒が半々の学校とは，すごく違うと感じたんだ．僕はそれまで人を特定のグループに区別したことがなかったんだ．それまでは一人の人を，それぞれの個性と，それぞれの見た目を持つ，一人ひとりの個体として見ていた．僕は人をグループに分けないで，僕はこう，ある人はそう，と見ていた．でもそのときは，その学校の男子たちは，みんな丸刈りと黒い目で，統一感があった．そのときまさに，僕は彼らをグループとして見て，自分はそのグループには属していないと認識したんだ．それはとても変な感じがした．人種とか肌の色とかの話ではなく，僕が認識したのは，ただの丸刈り頭と黒い目だったんだ．それが自分と違うとピンときた瞬間だった．僕は丸刈りにしてないし黒い目でもない，変だなあって．小学校では仲良しの黒人の友達もいたけど，それまでは彼らが僕とは違うとは考えたこともなかった．人種のことなんて知らなかったんだよ．違いがあるとは知らなかったんだ．僕が思っていたのは，色々な見た目の人が存在するということ．なぜなら白人が二人いたら，それぞれ見た目は違うし，黒人が二人いても，それぞれ見た目が違うから．」*

人口の上では圧倒的少数でもヨーロッパ系市民であれば，バルバドス社会の中では社会的特権を享受できる立場になることが少なくない．そして特別扱いをされる家族と共に行動することで，理由はわからないまでも，特権を持っているらしいことを子どもは感覚的に気づくようになる．そして，そのときから自分は社会で他人よりも優位に立つ存在だと漠然と認識するようになる．しかしリチャードは 10～11 歳まで白人・黒人という「人種」の観念を持つことがなかった．バルバドスには幼稚園から高校まで伝統的にヨーロッパ系白人の子女が多く通う私立学校がいくつか存在し，リチャードはそのうちの一つの学費が高価なことで知られる小学校に通っていた．リチャードの記憶では，その小学校ではヨーロッパ系子女とそれ以外が半々であった．その環境で「白人とその他」という区分を認識せずに 10～11 歳まで育ったことは特筆すべきである．おそらく人種差別的な学校生活を体験してこなかったことに加えて，非ヨーロッパ系の人々を蔑む価値観を持つ家庭環境ではなかったのであろう．実際に，実家に通っていたアフリカ系メイドに対する礼儀は両親から厳しく躾けられていたという．

リチャードの語りからは，ヨーロッパ系と非ヨーロッパ系の身体的特徴の違いについて，個人が

違えば見た目が違うという認識しか持っていなかったことが伺える．白人のバイデン現米大統領と白人のクリントン元米大統領の見た目が違うのと同様に，黒人俳優のモーガン・フリーマンと黒人俳優のデンゼル・ワシントンも見た目は違う．白人のバイデン現米大統領と黒人俳優のモーガン・フリーマンの見た目が違うように，白人のバイデン現米大統領と白人のクリントン元米大統領の見た目も違う．このような人間個人の「見た目」の違いに対する認識は持っていたというリチャードに，ある日，丸刈りの短髪に黒い目の非ヨーロッパ系生徒が大部分を占める教室を訪れる機会がやってきた．リチャードはそこに圧倒的な統一感を感じたという．同時に，丸刈りではないし，黒い目もしていないし，自分はその統一感のある集団には属していないのだと認識した．そこで初めて「人間の種類のようなもの」 が存在して，違いが存在するのだと認識した．これが初めて人種を認識した瞬間だったとして，リチャードは明らかに興奮して，この語りを共有してくれた．見た目が違うことが「人間の種類みたいなものが違う」ということに気づいたというリチャードであるが，この時には「人間の種類」ごとに社会的優劣があるとは考えていなかった．

で，お母さんはどんな反応をしたの？

「覚えているのは・・・一瞬びっくりしたみたいだったけど，『外界から隔離された居心地のいい空間に居すぎたのかもね （probably you are living in a bubble too long）』って言ったんだよ．その時は何を言っているのかわからなかった．泡（bubble）って何だよ，シャボン玉遊びしたこと？って（笑）．でも今はその時お母さんが言っていたことはわかるよ．自分の白人の息子を白人だけの環境に置きすぎたってことだろう？それにしても泡まみれの生活の居心地の良さなんてわからなかった．白人だけの環境が居心地いいかどうかはわからない．僕は一部の白人同級生に対して引け目を感じていたから．白人だけじゃない．政治家とか銀行員とかを両親に持っている黒人の子たちもお金持ちで，僕はこの子たちには勝てないと思った．奴らは休みごとに海外旅行に行っていた．だから僕にとって白人と黒人じゃなくて，お金持ちとお金持ちじゃない僕だったんだ．僕は制服と校則があってよかったと思ったのを覚えている．」

リチャードの母は，息子の何気ない一言から，ヨーロッパ系の子どもが多く通う小学校に入れた息子がアフリカ系の身体的特徴に関する知識を持たないことに気づいた．そしてアフリカ系市民が大部分を占める社会に暮らすにも関わらず，彼らの容姿を認識していない息子に母は驚き，居心地の良い白人だけの世界に息子を長く置きすぎたと思ったようだ．母は白人だけの世界が白人であるリチャードにとって居心地のいいものであると疑っていない．これはバルバドスのヨーロッパ系コミュニティにいる限り，アフリカ系市民からの人種的な嫌がらせに合うこともないからということだろうか．しかし語りにみられるようにリチャードにとっては決して居心地がいい環境だったとは言えなかった．

小学生のリチャードは白人と黒人といった人種の差異ではなく，自分には機会がない海外旅行に頻繁に行ける同級生と行けない自分との学外活動経験の機会の差，つまり経済格差を起因とする機会の差を強く感じていた．そのため多くの学外活動経験の機会を持つ同級生に対しては白人・黒人に関係なく，「この子たちには勝てない」という「引け目」を感じてしまうようになった．そのためバルバドスのヨーロッパ系市民という自身と人種的・文化的背景を共有する白人子女が多く在籍する小学校に通っていても，白人子女が多く在籍しているからという理由だけではリチャードにとって小学校は居心地が良い空間にはなり得なかった．

またリチャードは「制服と校則があって良かったと思った」理由について，「裕福でも裕福じゃなくても同じ制服で学校に来なければいけないし，流行りの髪型をしちゃいけないし，僕が持っていないゲーム機を持って登校する同級生はいないから」と即答した．リチャードは黒人の同級生が持っているブランド服やゲーム機を白人の自分が持っていないことにはまったく無頓着である．リチャードのナラティブには，白人であるリチャードが黒人よりも物質的に豊かで機会も豊富でなければいけないという人種的な気負いはまったく見られない．これは筆者がトリニダードのヨーロッパ系市民に対して行ったインタビューで聞き取った「銀行口座は空でも白人だから白人らしく黒人よりも良い暮らしをするべきだ」という語りに見られる，見栄を張って無理をしてでもヨーロッパ系市民はアフリカ系市民よりも物質的・文化的に豊

かな生活を送るべきだという価値観とは相反する．

さらにリチャードの両親が意識的に行っていたか否かは不明ではあるが，白人コミュニティにおける家族ぐるみの交流に特別に熱心ではないなどの理由で，リチャードは幼い頃より非ヨーロッパ系市民との学外での交流も一般的だったのであろう．実際に，リチャードはヨーロッパ系も非ヨーロッパ系も分け隔てなく友人がいたが，非ヨーロッパ系の彼らが自分と「違う」とは考えもしなかったと述べている．

1980 年代に生まれたリチャードの周りには，前述のウェインが生まれた 1940 年代とは異なり，1966 年の独立後にバルバドス政府が推し進めた公教育を受けて専門職に就く経済力をつけた非ヨーロッパ系市民が増えていた．主にアフリカ系市民が政府関連機関や銀行に勤めるようになり，教育こそが社会階層を上るためのツールであると認識するアフリカ系市民は子どもを学力レベルの高い学校に通わせた．ヨーロッパ系市民は学業をそれほど重視しない．なぜなら成績が良くとも悪くとも，就職適齢期になるとヨーロッパ系コミュニティの知り合いが経営する企業の管理職が用意されるからだ．したがって中学校から進学校に通ったリチャードの同級生はほとんどが教育で未来を切り拓くアフリカ系であった．

その後通っていた中学校で，リチャードはアフリカ系の同級生との交流を通じて人種差別のようなものがこの世に存在することは何となく認識し始めたと述べた．リチャードに「黒いアフリカ系市民よりも白い自分は優れていると思うか」と問うと，白人が非白人に対して持つ根拠のない優越感は「笑える」と言い切り，白人に対する非白人の僻みや妬みには「理解できる」とした．そして自分自身は非白人に対して優越感は持っていないと言い切った．リチャードの学生時代の非白人の友人たちは非常に成績がよく，常に自分の方が劣等感を感じる側だったという．そして自分はバルバドスにおいて白人だからという理由だけで優越感を感じる理由がないと述べた．

非ヨーロッパ系の同級生の方が，高級車に乗り，大邸宅に住み，海外旅行もして，自分よりずっと稼ぎはいいはずで，「僕はただのしがない白い男だよ」とも述べ，非ヨーロッパ系の友人たちと比較し，自分は特別なものを持ち合わせていないと強調した．世界に横行する人種差別や機会の不平等分配に関しても，「バルバドスに存在しないとは言えない」が，少なくとも「現代バルバドスでは白人だからという理由だけで非白人よりも良い経験ができる時代は終わっている」と発言した．

現在 20 代後半のリチャードは，今まで筆者が聞き取り調査を行ったことのあるヨーロッパ系のバルバドス市民のみならずカリブ海市民の中で，最も「人種」の違いに無頓着で，自身も受けている可能性のある社会的優遇に無関心な人物であった．リチャードは，ヨーロッパ系白人であるからという理由だけで優遇を受けることには関心がないと繰り返し述べ，また自身が優遇を受けてきた可能性について無自覚を強調していた．リチャードが常に優遇を受けていることを本当に気づかないでいることも考えられたし，人種差別主義者として見られたくないからと虚勢を張っているとも考えられた．非ヨーロッパ系市民によるヨーロッパ系市民の社会特権の非難に関する先行研究や，ヨーロッパ系市民の自らが今までに受けてきた優遇の告白などについて筆者が行ってきた先行研究の蓄積から判断すると，リチャードはあまりに鈍感すぎると感じた．

しかし 20 世紀末に生まれたリチャードは，自身の感覚として「確かにすべての人間は完全に平等じゃないのかもしれないけれど．白人と黒人がいる，インド人も中国人もいる．そのことと，誰が偉いか，優れているかというのは人種の問題じゃないと思う」と発言した．そして自身の妻はバルバドス生まれ育ちのアフリカ系だと言い，写真を見せてくれた．筆者の目には，リチャードの妻は完全なアフリカ系の黒人であった．

リチャードがアフリカ系の女性と結婚をしたことに家族がどのような反応を示したのかを聞いた．なぜなら筆者の先行研究では，ヨーロッパ系女性がアフリカ系男性と結婚する際に，家族の縁を切られ，白人コミュニティから追放されるほどの強い反対を表明された事例が存在したからである．そのため，ヨーロッパ系男性がアフリカ系女性と結婚した場合の家族の反応を聞き取りたかったからである．リチャードは「反対はされなかった．僕の家族は人種差別主義者ではないからね．僕が恋に落ちた相手がアフリカ系だったし」と述べた．

筆者がトリニダードやバルバドスで聞き取ったヨーロッパ系女性たちは，アフリカ系との婚姻や子どもを作ることに対して肯定的ではなかった．

植民地時代を生きた高齢のヨーロッパ系女性は，息子が混血児を作ることと，結婚して家族にヨーロッパ系でない人物が存在するようになる事態を「できる限り避けたい望まない状況」と述べた．また自分の娘は「賢い選択」ができるはずであると言い，アフリカ系を結婚相手として選ぶような「過ち」は起こさないはずであると述べた．アフリカ系と恋に落ち妊娠した経験のあるヨーロッパ系の若い女性は，アフリカ系は恋に落ちることはあっても結婚したい相手ではなく，「決して家族を心からの笑顔にさせることのない存在」であり，「こそこそと背後で同情される存在の混血の婚外子」を「私はカトリックだから産むわけにいかなかった」とする堕胎経験を語った．彼らにとって，法的かつ宗教的な婚姻に基づいた家族に「黒い血」が入ることは徹底的に避けたい事柄で，混血児を作ることは「白人よりも劣った」「醜い」「社会的に不利な」人間をこの世に生み出すことに他ならないという価値観があるからである．

上記の事例は，リチャードの「恋に落ちたから結婚して混血児が生まれて幸せな家庭を築いている」という語りとは徹底的に対照的である．家族の一員に黒人が仲間入りし，混血児ができることに対する許容度や，白人として享受できる特権に対する執着度が，まったく異なることが興味深い．これはジェンダーによる違いなのか，細かい階層の差による違いなのか，ここでは主な要因は判明しない．あらゆる社会的要素が複合的かつ重層的に影響しあって構成された価値観によって生まれた違いであることは推測できる．

> *「色々な見た目の人間がいる．それだけの問題だと思わない？そう，白と黒は違う．ある人は白い肌をしているし，ある人は黒い肌をしている．その人の足の人差し指が親指より長いか短いかの違いと同じレベルだよ．なぜ身体的な違いについてそんなに大騒ぎするんだろう．」*

このようにリチャードは，自身が白人であることは認識しているが，だからといって非白人よりも優れているとか，よりよい機会を得る権利があるとかはまったく考えたことがなく，自身には白人であるからという理由だけで享受できる社会特権はないと幾度となく強調した．これが 21 世紀のバルバドスのヨーロッパ系の若者の本心で，このような認識を持つ者が増えるのであれば，バルバドスは世界にもまれな白人特権が存在しない平等な社会が実現する可能性もあるだろう．

しかし筆者は懐疑的である．なぜならバルバドスは，肌の色の違いを足の指の長さの違いと同次元の違いとみなす社会ではないからだ．ヨーロッパの植民地支配を経験した世界中の旧植民地と同様に，英国の植民地支配を 341 年受けてきたバルバドスでは，ヨーロッパ系市民の優性，つまり白人の優性はヨーロッパ系市民自身の認識の問題だけではなく，非ヨーロッパ系市民が他者としてのヨーロッパ系市民を認識する際の，いわばステレオタイプ化されて均一化された属性になっている．

植民地化された経験が精神に与える影響について説いたカリブ海の仏領マルティニーク出身であるファノンの『黒い皮膚・白い仮面』[86]は，非ヨーロッパ系市民が疑うことなく信仰するそのヨーロッパ系市民の優性について，植民地化されてから拘束され続けている被支配層の精神を要因として挙げている．白い肌を「正義・誠実・清純」とする価値観は同時に，黒い肌に対して「醜悪・罪・無知・不道徳」とする表象を植え付けている．つまり独立後 50 年以上経過しているにも関わらず，バルバドスの非ヨーロッパ系市民は自らを「醜く，罪深く，無知で，不道徳」であると考え，ヨーロッパ系市民を憧れの「正義深く，誠実で，清純な」存在として見ているということだ．自分自身は奴隷のような被支配者となった経験がない非ヨーロッパ系市民が，大統領や首相，政府の要職を占める現代バルバドス社会においても，未だに 18 世紀の被支配者の精神性を持ち続けていることは注目すべきである．

アフリカ系配偶者との間の混血の子どもを幼稚園に迎えに行く際に，「なぜお父さんが白いのか」とクラスメイトたちから質問攻めにあっている姿を見たこともあると，リチャードは笑った．そのリチャードのアフリカ系の妻は，子どもたちが同じ幼稚園に通うママ友から「特権を持つ裕福なヨーロッパ系男性と結婚した幸運なアフリカ系配偶者」という扱いを受けるという．例えば，子どもが通う幼稚園でバザーが行われる際には，「一般市民が見たこともないアンティークの良品」の寄付を，バザーで販売する手作りクッキーは先祖代々続く「白人の秘密のレシピ」によって焼かれたものを期

待される．そして長期休暇前後には海外旅行先を尋ねられ，ヨーロッパ系市民が持つと彼らが信じて止まない特権について質問攻めにあい，ヨーロッパ系男性を配偶者に持つ人物のお友だちとして，その特権を経験できないかと婉曲に打診されるという．

リチャードは「『白人の秘密のレシピ』って一体なんなんだよ，魔女みたいじゃないか」とおかしそうに笑い，「なぜヨーロッパ系だからといって，特権を持ち，裕福で，特別な良家の跡取りだと先入観を持たれるのかまったく理解できない」と言う．そして「子どもの幼稚園の迎えにはエアコンが壊れてパワーウィンドーも動かない 25 年落ちの中古車で行く」と，裕福ではない自らの姿を強調した．リチャードが「まったく理解できない」ヨーロッパ系市民に対する先入観は，まさに非ヨーロッパ系市民によるヨーロッパ系市民に対する憧れによるものだろう．努力をしたら「白人みたいに」経済的には豊かになるかもしれない．しかしどのような努力をしても生まれ持った肌の色は変えることはできないし，自身の家族史も変えられない．このような語りからは，同じバルバドス社会に属しながらも，個人的に親しくなる前には，肌の色が違うだけで住む世界が違うと偏見の眼差しで見られてしまうことがわかる．

リチャードは，バルバドスのヨーロッパ系市民の一部は，非ヨーロッパ系市民が持ち得ない特権を持っているとは認識している．そして非ヨーロッパ系市民はヨーロッパ系市民を「特権があり裕福な存在」であると見ていることも知っている．しかし自分自身は，特別に裕福でもなく，特権を持っている認識はなく，持たないことを妬むこともなく，ヨーロッパ系市民だからといって特権を持つ時代は終わったと主張する．加えて，自身はヨーロッパ系市民としての特権は持っていないと認識するにも関わらず，アフリカ系配偶者を通じて，非ヨーロッパ系市民がヨーロッパ系市民である自分に対する憧れや偏見を持っていることも認識している．リチャードの経験はリチャード固有のものであり，バルバドスのヨーロッパ系市民すべてがリチャードと同質の経験をしているとは限らない．確かに，ヨーロッパ系市民の社会特権については自身には関係がないと述べる若いインタビュー対象者もいた．しかし現代のバルバドス社会を白人性の観点から観察すると，明らかにヨーロッパ系市民の優位や意図的な人種隔離を確認することができる．それゆえ 2023 年にこのヨーロッパ系の若者の経験を記録することで，現在のバルバドス社会周縁に置かれている若者のライフを通じて，社会における白人性を取り巻く様々な環境を複眼的な視点から見ることができる．

5．おわりに

2021 年 11 月，バルバドスは共和制に移行した．それによりバルバドスの君主は英国の君主ではなくなった．その植民地史が英国支配に終始したバルバドスは独立後も英国色が強いままである．そのため，ときに英国の影響が残っていることを尊重する愛称として，またはバルバドス社会としての未熟さを自虐的に揶揄する蔑称として，バルバドスは「リトルイングランド」と呼ばれている．だが共和制となったことで，少なくとも体制的には精神的・経済的・政治的な完全脱植民地化に向けた一歩が進んだことは確かである．

本稿は，英国支配の影響が社会階層や人々の精神面に強く残るバルバドスにおいて，白人としての認識である白人性がどのように構築されていくのかという問いの一端をオーラル・ヒストリーの手法を用いて探求した．独立後も真の人種的な融合は果たせていないバルバドス社会に生きる，植民地時代を生きた経験を持つ 60 代後半の元外交官ウェインと，20 代後半の今どきの若者リチャードという年代の異なるヨーロッパ系市民二人の語りから，いつ・どのような経験に基づいて白人としての認識を持つようになったのかを見た．幼少期に非ヨーロッパ系市民との身体的特徴の違いに気づくと，その違いを基準とする，守らなければいけないらしい人種間の社会的境界に気づく．肌の色が白い人はこれ，黒い人はそれ，といった区分は社会を分断し，人種差別・逆人種差別・憧れ・妬み・僻み・憎しみ・恐れ・偏見を生み出す．そしてリチャード自身は恩恵を受けていないと主張するが，肌の白い人が社会的優遇を受けるようになり，優遇を受けられない肌の黒い人との間に生じる不公平感が人種間の溝をさらに深くし，結果としてバルバドスとしての社会統合を阻むようになる．

人口の 9 割以上がアフリカ系黒人と自己認識する社会における，ウェインとリチャードの社会少数派である「白人」としての経験は，決して明るい

ものだけではない．ヨーロッパ系であるというだけで，奴隷貿易や奴隷労働力搾取により蓄えた富を引き継いでいる富裕層に違いないと偏見を押しつけられること，植民地時代に支配層が行っていた奴隷所有や労働力搾取などの蛮行に対する罪の意識を強制されるように感じる社会の風潮があることなど，社会の一員として居心地が悪くなるストーリーが表出した．しかしこれは，現実として植民地時代と変わらぬ白人至上主義思想や人種差別的社会不平等を正当化する特権意識を持つヨーロッパ系市民が横行する事実の裏返しであり，さらには，それを許す社会が存在すること，つまり非ヨーロッパ系市民自身が社会における不平等な立場を容認していることを示唆する．

人口のほとんどを占める非ヨーロッパ系市民はなぜ人口の2.7%しか存在しない圧倒的少数のヨーロッパ系市民への優遇を止めないのか．英国から独立して約 60 年が経っても，かつて植民地化したヨーロッパ人が持つ白い肌への従属を強いる精神的な束縛が，なぜ植民地化された人々に対して亡霊のようにまだ有効なのか．大統領も首相も政府要職もアフリカ系が占めるのに，また法律では肌の色による差別・区別・優遇政策を禁止しているのに，なぜ未だに少数のヨーロッパ系市民は社会的特権を持っていると糾弾されるのか．

本稿で引用したウェインとリチャードの語りからは，そのような人種間不平等に対して問題意識を抱き，人種間融合を推進できないその現実を改善しようとする意識が読み取れる．自身が享受していると認識しているか否かは別にして，彼ら二人はヨーロッパ系市民が社会的に優遇されている立場にあること，それは非ヨーロッパ系市民に対して不平等であるため問題であることを認識している．彼らの認識はバルバドスのすべてのヨーロッパ系市民の声を代弁しているものではない．本稿で紹介した彼ら二人の非ヨーロッパ系市民への態度や，社会特権や不平等に対する姿勢は，この二人特有のものであり，それは彼らそれぞれ二人にしか語れない彼ら自身の経験に基づいている．したがって極論をいえば，この二人以外のすべてのヨーロッパ系市民はまったく異なる意見を持ち，白人至上主義的な感覚を持ち特権を当たり前のものと考えているのかもしれない．

確かに，たとえ白人至上主義的な考えを持っていてもインタビューではあえてそのような考えに基づいた発言をしないということは大いに考えられた．しかし調査者である筆者に嘘をついても何も得することはない．その上，ウェインとリチャードの配偶者はヨーロッパ系ではない．白人でないパートナーに人種的優越感を抱き，差別的な行いをしながら婚姻関係を続けるのは精神的な負担過多で不健康であり，通常では考えられない．したがってウェインとリチャードはヨーロッパ系市民として人種問題に敏感ではあるが，決して人種差別主義者ではないと言えるであろう．

本稿はウェインとリチャードの 2 人の語りから，バルバドスのすべてのヨーロッパ系市民が白人優越意識を持つ人種差別主義者であるわけではなく，そう認識されることに対しても考えや対応はさまざまであることを明らかにした．特にウェインはバルバドスの人種差別を当然のものとする社会が改善する可能性を信じ，メディアで人種間の亀裂を修復するための提言も行っている．他方リチャードは，白人の人種的優越感はくだらないと言い切り，距離を置こうとする．そしてリチャードは，巷にはヨーロッパ系市民が享受できる社会特権が存在することを認識しているが自身は特権とは無縁であるため，非ヨーロッパ系市民から自身の白人性について憧れや妬みを持たれるのは筋違いであると心底うんざりしている．しかし特権は求めて与えられるものではない．ヨーロッパ系市民が享受してきた白人の社会特権は社会システムとして既にバルバドスの日常生活に組み込まれている．したがってバルバドスにおいては，望むと望まざるとにかかわらず白い肌を持つヨーロッパ系市民である限り，社会的優遇が保証される社会が構築されている．

非ヨーロッパ系市民に対する優越意識や差別意識をまったく表明しなかった二人に対するインタビューを，筆者は途中まで煙に包まれたような感覚を持って行っていた．筆者がバルバドス社会を知るために情報収集していたマスメディアや SNS 上で匿名のもとに交換される意見等のナラティブに登場するヨーロッパ系市民たちは，人種差別主義的で特権を振りかざし，非ヨーロッパ系市民に様々な苦難や従属的立場を強いていたからだ．数少ない現代バルバドス社会の人種関係に言及した研究も，人種の話題に敏感で肌の色が明るい人ほど上部を占めることができる階層化した社会の中の人種差別的なヨーロッパ系市民について指摘し

ていたからだ[87]．つまり筆者が収集に成功した資料においては，ヨーロッパ系市民は「悪者」であった．そうであるからこそ，ウェインとリチャードの語りに見られる人種問題に対するトーンは，筆者が予測していたものとはかけ離れすぎていて驚き以外の何ものでもなかった．

筆者は，インタビュー・分析・解釈，本稿における語りの提示方法に関し，中立性を保つよう心がけた．しかしここで筆者が自省し認めざるを得ないのは，現地調査前の準備として行ってきた資料調査を根拠として，筆者はヨーロッパ系市民が「悪者」であるという先入観を持つようにならなかったとはいえないのではないかという懸念である．調査者として非常に気をつけていたが，インタビューの際に，口調や雰囲気としてヨーロッパ系の「悪者」から言質を取ろうとするような態度が筆者になかったか．またウェインやリチャードがそのような気を察してしまい，萎縮したり壁をつくったりして，「語ってもらえたはずだったこと」を語ることなく，限定された，もしくは虚構の語りのみに終始していなかったか．居住経験がなく，調査のためにバルバドスを訪問しただけの筆者は，歴史書に掲載されていない過去の具体的な事例や今までに注目されたこともない個人の個性的な社会的経験を聞き取るべく，インタビュー開始数分でウェインやリチャードとの間に，ラングネス（1993）が言うところの「ある程度の親密さ」[88]を築けていただろうか．また佐藤（1992）が言うところの「客観性を失わないラポール」[89]を築けていただろうか．ここにライフストーリーやオーラル・ヒストリーの難しさ，そして同時にその深さと可能性を見た．

さまざまな資料において人種差別主義的なヨーロッパ系市民を描き出すナラティブの発信元はその当事者であるヨーロッパ系市民ではなかった．少数派の存在や言い分，そして彼らならではの経験は，多数派の声に消されがちで，また多数派の一方的な偏見によって生成されがちである．こういった事例は本論で取り上げたカリブ海地域のヨーロッパ系市民だけでなく世界のどこでも起こりうるが，日本社会では移民・難民・留学生を含めた外国人，心身障がい者，性的マイノリティ，貧困層，女性，先住民など，彼ら主体の声は積極的に聞かれることなく伝統的に周縁に追いやられてきた．そのように先入観と偏見を基に社会的に虚構の姿をつくりあげられ個人としての姿を軽視されてきたヨーロッパ系市民個人の経験を，丁寧に拾って記録し，彼らそれぞれ一人の人間としての包括的な生から，彼らが生きてきた歴史的・社会的な全体像をつかもうとするオーラル・ヒストリーの意義は大きい．

本稿は，バルバドスのヨーロッパ系市民が言う「パンドラの箱を開けた」．バルバドスのヨーロッパ系市民の視点から人種社会に着目し，現代のバルバドス社会を生きる 2 人，ウェインとリチャードの語りを通じて白人至上主義思想や特権意識，歴史的責任に関する認識を明らかにした．ただし本稿は自身を純血の白人だとする中流階層出身の男性 2 人の語りを分析したに過ぎない．本稿では取り上げたこの 2 人の語りをそのままバルバドス社会史における唯一の史実として扱うことはしない．しかしながら本稿は，バルバドス社会を理解するための一助となる彼らそれぞれ個人の具体的な経験とその認識・解釈を，貴重な「事実の一つ」として提示した．

後続研究ではヨーロッパ系市民を生み出す女性や身体的特徴は白人だが混血の事実が明らかな者，白人としての立場が流動的な混血者や非ヨーロッパ系市民，プランテーション所有者の子孫やプアーホワイトの子孫などの語りにも注目し，ヨーロッパ系市民を取り巻くバルバドス社会をさらに多角的な視点から分析したい．また近隣のカリブ海諸島の事例と比較することで，カリブ海地域を白人性という視点から俯瞰することが可能となり，カリブ海地域への理解が深まることが期待できるだろう．

謝辞

My deepest gratitude goes to the European-descended white people of Barbados and Trinidad. Without your inspiration and valuable knowledge, this study would not be completed. I would like to express special appreciation to Ms. J. Innis, Ms. A. Israel, Ms. K. Black, Ms. A. Reason, and Mr. W. Cezair.

付記

本研究は，JSPS 科研費 JP21K12410 および大妻女子大学戦略的個人研究費（S2105）の助成を受けたものです．

引用文献

[1] Barbados Statistical Service. “2010 Population and Housing Census”. http://www.barstats.gov.bb/files/documents/PHC_2010_Census_Volume_1.pdf, (accessed 2022-11-8).

[2] Walthrust Jones, Natalie J. et al. “Racism in Barbados in the 21st Century: Forty Years beyond the Growth of the Modern West Indies”. Interculturalism, Meaning and Identity. Leiden, The Netherlands: Brill, 2013: 89-98.

[3] Beckles, McD Hilary. A History of Barbados: from Amerindian Settlement to Caribbean Single Market. Cambridge University Press, 2006: p.8.

[4] Beckles, McD Hilary. “Kalinago (Carib) Resistance to European Colonisation of the Caribbean”. Caribbean Quarterly, 2008, 54(4): pp. 77-94.

[5] Sheppard, Jill. The “Redlegs” of Barbados. 2nd ed., KTO Press, 1977, p.33.

[6] Sainsbury, W. Noel, ed. Calendar of State Papers Colonial, America and West Indies, Volume 7, 1669-1674. London: Her Majesty's Stationery Office, 1889. Digital version at British History Online. https://www.british-history.ac.uk/cal-state-papers/colonial/America-west-indies/vol7/pp487-499, (accessed 2022-11-8). (Barbados entries appear on pages 496 and 497, entry 1101).

[7] Beckles. 2006, p.6.

[8] Sauer, Carl Ortwin. The Early Spanish Main. Cambridge University Press, 1966: p.193.

[9] Wills, Mary et al. “The Transatlantic Slave Economy And England’s Built Environment: A Research Audit”. https://historicengland.org.uk/research/results/reports/8203/TheTransatlanticSlaveEconomyandEngland%E2%80%99sBuiltEnvironment_AResearchAudit, (accessed 2022-11-9).

[10] Jordan, Don. et al. “Barbadosed”. White Cargo: The Forgotten History of Britain’s White Slaves in America. New York University Press, 2007, p.187.

[11] Bryan, Patrick. “The White Minority in Jamaica at the end of the Nineteenth Century”. Howard Johnson and Karl Watson eds. The White Minority in the Caribbean. Ian Randle, 1998, p.116-132.

[12] Ferreira, Jo-Ann S. The Portuguese of Trinidad and Tobago: Portrait of an Ethnic Minority. The University of the West Indies Press, 2018, p.21.

[13] de Verteuil, Anthony. The Corsicans in Trinidad. Litho Press, 2005, p.272.

[14] Williams, Eric. Capitalism and Slavery. The University of North Carolina Press, 1944, p.17.

[15] Harlow, Vincent T. A History of Barbados, 1625-1685. Oxford University Press, 1926, p.307.

[16] Ibid. p.295.

[17] Organization of American States. Inter-American Commission of Human Rights. “The situation of the People of African Descent in the Americas”. 2011. https://www.oas.org/en/iachr/afro-descendants/docs/pdf/afros_2011_eng.pdf, (accessed 2022-11-8).

[18] Inter-Caribbean Legal. “Inheritance Laws in Barbados”. https://intercaribbeanlegal.com/wp-content/uploads/2019/10/Inheritance-Laws.pdf, (accessed 2022-11-8).

[19] Donnell, Alison. et al. Caribbean Irish Connections. The University of the West Indies Press, 2015, p.6.

[20] Akamatsu, Rhetta, The Irish Slaves: Slavery, indenture and Contract labour Among Irish Immigrants. CreateSpace Independent Publishing Platform, 2010, Chapter 3.

[21] “The Redlegs – Ireland’s Sugar Slaves”, http://moondance.tv/show/the-redlegs-ireland-sugar-slaves/, (accessed 2022-11-8).

[22] Lewis, Gary. White Rebel: The Life and Times of TT Lewis. The University of the West Indies Press, 1999.

[23] Sheperd, Verene et al. eds. Caribbean Slavery in the Atlantic World. Ian Randle, 1999, p. xv-xix.

[24] 2016 年と 2017 年にバルバドスで調査を行った際，非ヨーロッパ系市民はヨーロッパ系市民を “Thief”, “devil”, “cheater”と呼んでいた．非ヨーロッパ系市民のヨーロッパ系市民に対する反感は以下の URL のコメント欄を参照ありたい．Ellis, Daveny. “Activist asks white Bajans to examine their role in local racism”. Loop Barbados News, June 18, 2020. https://barbados.loopnews.com/content/white-bajans-asked-examine-role-local-racism, (accessed 2022-11-8).

[25] フランツ・ファノン．黒い皮膚・白い仮面．みすず書房，1998, p.114.

[26] Kingsbury, Paul. “Riddims of the Street, Beach, and Bureaucracy: Situating Geographical Research in Jamaica”. Southeastern Geographer, 2005, 45, p. 251-273.

[27] Brennan, Fernne. Race Rights Reparations: Institutional Racism and The Law. Routledge, 2017, p.1.

[28] Benn, Emma K.T. et al. “Skin Bleaching and Dermatologic Health of African and Afro-Caribbean Populations in the US: New Directions for Methodologically Rigorous, Multidisciplinary, and Culturally Sensitive Research”. Dermatol Therapy, 2016, 6, p.453-459.
[29] Tate, Shirley. Skin bleaching in black Atlantic zones: Shade shifters. Palgrave MacMillan, 2015, p. 2.
[30] Ferguson, Gail M. et al. “Self-esteem among Jamaican children: Exploring the impact of skin color and rural/urban residence”. Journal of Applied Psychology, 2007, 28, p.345-359.
[31] National Human Genome Research Institute, “International Human Genome Sequencing Consortium Publishes Sequence and Analysis of the Human Genome”, February 12, 2001. Press release. https://www.genome.gov/10002192/2001-release-first-analysis-of-human-genome, (accessed 2022-11-8).
[32] Scott, Robert A. et al. “ACTN3 and ACE genotypes in elite Jamaican and US sprinters”. Medicine & Science in Sports & Exercise, 2010, 42(1), p.107-12.
[33] 加藤和人．人種の表象とリアリティ：ゲノム時代の医療をめぐる科学的表象．京都大学人文科学研究所，2007. https://ocw.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2007/04/2007_zinbunkenakademi_14.pdf,（参照 2022-11-8）.
[34] 加藤．2007, p.16.
[35] 藤川隆男編．白人とは何か？-ホワイトネス・スタディーズ入門．刀水書房，2010, p.10.
[36] Ho, Arnold. K. et al. “Evidence for hypodescent and racial hierarchy in the categorization and perception of biracial individuals”. Journal of Personality and Social Psychology, 2011, 100, p.492-506.
[37] 山本めゆ.「名誉白人」の百年: 南アフリカアジア系住民をめぐるエスノ-人種ポリテイクス. 新曜社，2022, p.161.
[38] Frankenberg, Ruth. White Women, Race Matters: The Social Construction of Whiteness. University of Minnesota Press, 1993, p.3.
[39] 藤川．2010, p.10.
[40] 杉本淑彦．白色人種論とアラブ人-フランス植民地主義のまなざし．藤川隆男編．白人とは何か．刀水書房，2010, p.60-70.
[41] Torigoe, Chie. “Whiteness discourse in Japan: The construction of ideal beauty and racial Others in cosmetic surgery advertisements”. Studies in English language and literature. 2012, 52(3), p.71-94.
[42] Holmes, Oliver. “Thai ad with ‘white makes you win’ message lambasted for racism”. The Guardian. Jan 8th, 2016. https://www.theguardian.com/world/2016/jan/08/thai-advert-white-makes-you-win-skin-whitening-lambasted-for-racism, (accessed 2022-11-8).
[43] Ito, Michiru. “Constructing and Reproducing Whiteness: An oral history of French Creoles in Trinidad”. International Journal of Human Culture Studies. International Journal of Human Culture Studies, 2016, 26, p. 613-645.
[44] Sheppard. 1977, p.33.
[45] Jones, Cecily. Engendering whiteness: White women and colonialism in Barbados and North Carolina, 1627-1865. Manchester University Press, 2007, p.17.
[46] O’Collaghan, Sean. To Hell or Barbados: The Ethnic cleansing of Ireland. O’Brien Press, 2000, p.244.
[47] Ibid.
[48] 江頭説子．社会学とオーラル・ヒストリー．大原社会問題研究所雑誌. 2007, No.585, p. 11-32.
[49] 大出春江．産婆と産院の日本近代．青弓社，2018.
[50] 桜井厚．境界文化のライフストーリー．せりか書房，2005.
[51] 高山真．“被爆者”になるー変容する“わたし”のライフストーリー・インタビュー．せりか書房，2016.
[52] 小倉康嗣．非被爆者にとっての〈原爆という経験〉広島市立基町高校「原爆の絵」の取り組みから. 日本オーラル・ヒストリー研究. 2018, 12, p. 23-41.
[53] 木谷岐子．自閉症スペクトラム障害の一女性が語るライフストーリー：「自分」への苦悩に焦点をあてて．人間性心理学研究．2016, 34(1), p.61-71.
[54] 青木秀光．統合失調症の娘を抱える父親のライフストーリーー個人の複雑な生の一端を捉えるためにー．Core Ethics. 2014, 10, p.20-14.
[55] 大島岳．HIV とともに生きるー傷つきとレジリエンスのライフヒストリー．2020．一橋大学大学院社会学研究科博士学位論文.
[56] 廣本由香. パイナップルの両義性—台湾移民二世のライフヒストリーにみる「資源」の「地域化」. 関礼子・高木恒一編著．多層性とダイナミズム–

沖縄・石垣島の社会学．東信堂，2018，p.27-48.
[57] 蘭由岐子.「病いの経験」を聞き取る：ハンセン病者のライフヒストリー．皓星社，2004.
[58] 浅野千恵. 女はなぜやせようとするのか-摂食障害とジェンダー．勁草書房，1996.
[59] 林久美子．DV 被害者の生活再建における困難とアフターケアの課題に関する研究．2020, 武庫川女子大学大学院博士学位論文.
[60] 保坂渉．ひきこもりのライフストーリー．彩流社，2020.
[61] 川上郁雄. 私も「移動する子ども」だった- 異なる言語の間で育った子どもたちのライフストーリー．くろしお出版，2010.
[62] 三代純平．セカンドキャリア形成へ向けた文化資本としての日本語ースポーツ留学生のライフストーリーから．言語文化教育研究．2014, 12, p.221-240.
[63] 桜井厚. ライフストーリー論. 弘文堂, 2016, p.6.
[64] 原彬久．戦後政治の証言者たちーオーラル・ヒストリーを往く．岩波書店，2015.
[65] 御厨貴・渡邉昭夫．首相官邸の決断ー内閣官房副長官石原信雄の 2600 日．中公文庫，2002.
[66] 小泉純一郎．決断のときートモダチ作戦と涙の基金．集英社，2018.
[67] 小倉康嗣．ライフストーリー研究はどんな知をもたらし，人間と社会にどんな働きかけをするのか：ライフストーリーの知の生成性と調査表現．日本オーラル・ヒストリー研究．2011, 7, p.137-155, p.138.
[68] 山﨑晶子．現代フランスのエリート形成：言語資本と階層移動．青弓社，2022, p.116.
[69] 桜井厚．インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方．せりか書房，2011, p.22.
[70] Ito, Michiru. “French Creoles in Trinidad: Constructing and Reproducing Whiteness”. 2006. Master’s Dissertation. University of Warwick.
[71] Ito, Michiru. “Constructing and Reproducing Whiteness: An oral history of French Creoles in Trinidad”. International Journal of Human Culture Studies, 2016, 26, p.613-645.
[72] 伊藤みちる．旧英領カリブ海地域における白人性の多様性ーバルバドスとトリニダードの比較．人間生活文化研究．2018, 28, p.660-695.
[73] Ito, Michiru. “Questioning Whiteness: ‘Who is white?’–A case study of Barbados and Trinidad”. International Journal of Human Culture Studies. 2019, 29, p.129-137.
[74] Walters, Ivan Hugh. Education and Cultural Politics: Interrogating Idiotic Education. iUniverse, 2012, p.15.
[75] Walmsley, Imogen. “Post-racial Barbados? Continuing narratives of white dominance”. Centre for Ethnicity and Racism Studies Working Paper 2016. University of Leeds. https://cers.leeds.ac.uk/wp-content/uploads/sites/97/2013/05/Post-racial_Barbados-Imogen_Walmsley.pdf, (accessed 2022-11-8).
[76] 2016 年 8 月バルバドスにてインタビュー対象者（69 歳女性）の発言より.
[77] Shaw, Anny. "Oxford University's All Souls College drops Christopher Codrington's name from its library-but refuses to remove slave owner's statue". The Art Newspaper. January 6, 2021. https://www.theartnewspaper.com/2021/01/06/oxford-universitys-all-souls-college-drops-christopher-codringtons-name-from-its-librarybut-refuses-to-remove-slave-owners-statue, (accessed 2022-11-8).
[78] Common Ground Oxford. “Response to ‘All Souls’ College and the Codrington Legacy’ Statement”. November 19, 2020. https://docs.google.com/document/d/1VddRPx8vQkwRbyD-V5jsRx_fF9726dS9ga6H7UNFje4/edit?fbclid=IwAR0MLtYJiNSCMPS4-eyGwKIil7teOAtvpSRkE5tVSw3UIKj-f-LeB1kugzg, (accessed 2022-11-8).
[79] Jones, Cecily. Engendering whiteness: white women and colonialism in Barbados and North Carolina, 1627-1685. Manchester University Press, 2007, p.17.
[80] O’Callaghan, Sean. To Hell or Barbados: The Ethnic Cleansing of Ireland. Brandon, 2013, p.86.
[81] Shepard. 1977, p.29.
[82] Lewis, Gary. White Rebel: The Life and Times of TT Lewis. The Press, University of the West Indies, 1999, p.136.
[83] Walthrust et al. 2013, p. 95.
[84] Ibid.
[85] Beckles. 2006, p. 298.
[86] ファノン．1998, p.120.
[87] Walmsley. 2016.
[88] ラングネス・ルイス．ライフヒストリー研究入門ー伝記への人類学的アプローチ．米山俊直，小林多寿子 訳．ミネルヴァ書房，1993，p.52.
[89] 佐藤郁哉．フィールドワーク．新曜社，1992，p.173.

Abstract

This paper explores questions of white identity, defined as European-descended whites, in the former British colony, Barbados. Specifically, this research examines how European-descended whites perceive their difference from the non-white "others" and the nature of the relationships they establish with these "others". In August 2016 and 2017, oral history interviews were conducted in Barbados, with adult participants who consider themselves white and who are considered white by other whites. Follow-up online interviews were conducted in 2021 and 2022. As stated, these persons are aware of differences in skin colour before school age, and come to realize their own whiteness and racial boundaries through daily interactions with non-white others. The narratives reveal their disapproval of white supremacy and privilege that encourage social inequalities based on skin colour. A sense of entitlement envelops whites' accountability and guilt over the norm of social inequalities that connect deeply to systemic racism. At the same time, a young man completely rejected the very idea of white superiority and any associated social privilege, only on account of him being white.

（受付日：2023 年 7 月 24 日，受理日：2024 年 1 月 29 日）

伊藤　みちる（いとう　みちる）
現職：大妻女子大学国際センター 准教授

University of Warwick, Centre for Caribbean Studies. MA in Social Research with Specialism in Race and Ethnic Studies.
University of Leicester, MA in International Relations and World Order with Merit.
専門は社会学．ジャマイカ，トリニダード，ガイアナ等，延べ 10 年間に亘る駐在生活で見聞した問題を中心に旧英領カリブ海地域の多民族関係や社会問題について研究している．

主な著書：『カリブ海世界を知るための 70 章』．（共著，明石書店）．
Ito, M. Yoichi Watanabe: A Steelpan Archivist. Interviewing the Caribbean. 2021, 7(1), p.154-160.
Ito, M. Constructing and reproducing whiteness: An oral history of French Creoles in Trinidad. International Journal of Human Culture Studies. 2016, 26, p.613-645.
Ito, M. Whiteness and the Great Houses as 'symbols of slavery'. International Journal of Human Culture Studies. 2021, 31, p.382-392.
伊藤みちる．カリブ海地域におけるイスラム社会の形成と現況．人間生活文化研究．2019, 29, p.603-609.
など